



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	若き森有礼のロシア観をめぐって
Author(s)	外川, 継男; Togawa, Tsuguo
Citation	スラヴ研究, 32, 73-105
Issue Date	1985
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/5147
Type	departmental bulletin paper
File Information	KJ00000113243.pdf



若き森有礼のロシア観をめぐって

外 川 継 男

(1)

1866年（慶応2年）8月1日から9月10日にかけて、当時ロンドン大学のユニバーシティ・カレッジに留学していた19歳の森有礼は、夏休みを利用して同じ薩摩藩の留学生でなる松村淳蔵¹⁾とともに、ロシアの首都であるサンクト・ペテルブルグを訪れた。この時のロシア訪問を彼は日記の形で書きのこし、それに『航魯²⁾紀行』と題した。

この日記はその後ながく見捨てられていたが、大久保利謙によって森家の文書の中から発見され、1941年（昭和16年）4月、雑誌『月刊ロシア』の第7巻第4号に、「森有礼の『航魯紀行』——日露文化交渉史の一齣——」と題して初めて発表された。これはその後、誤読や誤植を訂正された上で、1972年（昭和47年）に『森有礼全集』の第二巻に収録された。

森有礼の伝記的研究の上で、大久保より前にこの『航魯紀行』に言及したものとして、1899年（明治32年）に出版された、木村匡編『森先生伝』がある。木村はこの中で『航魯紀行』から四箇所引用しているが、これには森自身が命名した『航魯紀行』というタイトルは出されず、木村はこれを日記として扱い、しかもその言及はわずか三ページにすぎなかった。しかし、木村のこの伝記の中にはロンドン留学時代（1865-1867）の森の実兄、横山安武にあてた十通の手紙が掲載されており、とくにその中の一通は若き森のロシア観を知る上で不可欠な資料である。しかし1964年（昭和39年）になって、林武二はこの木村の編集した書簡の順序に誤りがあることを見出し³⁾、『森有礼全集』においては、この誤りが訂正された上で、さらに木村の本には入っていなかったもう一通の書簡が付け加えられて刊行された。

林は『日米フォーラム』に連載した論文⁴⁾の中で、白らがイギリスやアメリカで発見し

- 1) 松村は本名は市来勘十郎といい、森より五歳年上であった。彼は後に海軍兵学校長を勤め、中将まで昇進したが、留学から帰国後もロンドン留学時代の仮の名で通した。森は本名を森金之丞といたが、留学中の仮の名は沢井鉄馬と称した。森と同じ時にイギリスに渡航した17人は、海外渡航は藩命とはいえ国策をおかすことになるので、すべて仮名を用いていた。なお幕府によって正式に海外渡航が許されるのは、1866年5月21日（旧暦4月7日）からである。
- 2) 東京帝大名誉教授の重野安繹が明治37年3月13日に東京学士会館で語ったところによれば、明治5、6年頃ロシア政府は日本政府に対して、魯西亜の魯は魯鈍の魯になり、字が悪いから露の字に変えてもらいたいと申し出てきた。このとき一部の者は、魯は孔子の生まれた国の名で、儒者はこの文字を尊んでいるのに対し、露（つゆ）ははかないもので、日露となると日が出ると露が乾くという理由から、変更を反対したが、結局先方の申し出を受け入れて、魯を露に変えたという。重野安繹『幕府時代魯人北海之関係』『東洋学芸雑誌』21巻、272号（1904）、244-245ページ。
- 3) 林武二「幕末の海外留学生（4）」、『日米フォーラム』第10巻第6号（1964）、75ページ。しかしこの論文の74ページに「手紙は、最初のもので、慶応三年八月七日附のもので」とあるのは、「慶応元年八月七日」の誤植である。
- 4) 『日米フォーラム』第10巻、第1、第2、第4、第6、第7-8号。

た新しい資料を用いて森の留学体験を詳細に論じたが、『航露紀行』に言及することはすくなく、したがって若き森のロシア観を知る上では不十分である。

木村や大久保や林の研究に導かれて、上記兄あて書簡や『航露紀行』を論じたものに、I. P. ホールの著わした森の伝記的研究⁵⁾がある。これは『森有礼全集』が出版される前に執筆されたが、全集に収められた資料は校正の段階で目を通したといわれる。この研究はロンドン留学時代の森に与えた元駐日イギリス大使館書記官で、当時下院議員であったローレンス・オリファント（後述）の与えた影響という点で、林の研究を継承するとともに、森のロシア観を分析している。

本論は以上の資料や研究に立脚しつつ、若き日の森有礼がロシアをどのように見ていたか、そしてそのようなロシア観が何に由来するものであったかを、さまざまな角度から考えてみようとするものである。いうまでもなく森は外交官としてはアメリカ、清国、イギリスに駐在して、主として条約改正の問題にあたり、また文部大臣としては国体に即した教育制度の確立に専念し、ロシアとは特別な関係は持っていなかった。さらに森が1889年（明治22年）大日本帝国憲法発布の日に42歳で兇刃に倒れたことは、もし彼が生きていたら活躍したかも知れないロシアとの交渉の場を奪うこととなった。しかし19歳の彼が書き残した兄あての手紙とロシア旅行の際の日記は、単に森の伝記的研究の上で興味ある素材を提供してくれるだけでなく、近代日本のロシア観の形成をたどる上でも見逃すことのできないものだといえよう。

(2)

森有礼がロシアについて言及しているのは、記録に残っているかぎりでは、1866年6月3日に、彼が兄である横山安武にあてた以下の書簡が最初である。この文章を書いた時の森は、ロンドンに着いて一年と一カ月、高見弥一⁶⁾とともにロンドン大学の化学の教授であるグリーン博士の家に下宿し、同大学において歴史、化学、物理、数学などを学んでいた。薩摩藩がイギリスに送った留学生中、森は松村、高見、吉田清成らとともに海軍測量術を学ぶことをめざし、東郷愛之進、町田実積の二人は海軍機械術、畠山義成、村橋直衛、名越時成は陸軍学術、鮫島尚信は文学、田中盛明（朝倉盛明）は医学、中村博愛は化学を専攻することになっていた。森は勉強についてはとくに数学にすぐれ、初め算術の加減から入ったにもかかわらず、二年たった時には球面三角法まで学ぶにいたったという。この挿話をつたえた海門山人の『森有礼』には、当時の森の勉強課目の中に歴史を入れているが⁷⁾、木村匡の『森先生伝』には化学、数学、物理の三課目のみあって歴史は入っていない⁸⁾。おそらく森はロンドン大学で正規の授業として歴史を勉強したことはなかったであろう。しかし以下の書簡が示すように、彼は独学で欧米の近現代史を学んだものと推測されるのである。

いずれにしてもこの兄にあてた手紙は、『航魯紀行』と並んで若き日の森のロシア観を見る上で不可欠にして唯一の資料であり、煩をいとわずほぼ全文を以下に引用することと

5) Hall, I. P., *MORI ARINORI*, Harvard University Press., 1973.

6) 仮名は松元誠一。彼は留学1年余にして、日本へ帰った。

若き森有礼のロシア観をめぐって

する。なおこの手紙の冒頭で森は、この中で述べたロシアに関する事項は、「追々観察伝聞」したところで、あるいは兄⁹⁾の参考にもなるかと思つて書き送る次第である旨記している¹⁰⁾。

「彼の魯国の今要する所一の香港を得るに有之。若今日本彼と親交を結び候はば、不日にして彼必申すべし。英仏其他米國等、今頻に日本を呑まんと欲す。故に我は日本に力を合せて之を防ぐべしと。之を餌にして彼申すべし、願くは仮に一港の要地に墩を備へん。又要港には艦を備へん。如此なれば彼其所に衛を置べし。然れば我邦已に彼の腹中にあるは多言を費やさず。彼は港を要む^(ママ)未だ持たざるの故なれども全く無きにはあらず。ペートルビルあり、世に善港といふ。唯仲夏船の通路ありて余の季には満海水を結んで海路絶て無く。故にありてなきに同じ。外にも黒海に善港あり。併し先年セバステポール大戦の後、歐羅巴諸国会盟して其処に墩艦を備ふ可らずとの法を設けたり。故に是亦ありて無きに均し。即今、又偶々印度を襲はんと欲して能はず。英の守嚴なればなり。トルコを奪ひ、コンスタンチノーブル（トルコの都）を取らんと欲しても、西洋各国之を抑ふ。今又支那の地方を掠領すること切なりと雖、是亦海辺を遙かに隔て、さまで益なし。終に漸く我に迫り、已に蝦夷の地過半を奪ふ。然れども辺地にして利益多からず。故に転じて対馬を握らんと欲して英仏之を防ぎて遂に握る能はず。斯の如くにして彼未だ一港を得ず。故に今窃かに猫智を抱き鷲爪を蔵して、外容頻に神妙を飾り、内には狼心を養ひ、只寸間を狙ふ。故に先年我国人一変^(ママ)魯國人を殺せし時も、さまで問ひもせず、却て我国人を惠遇する事実に著し。又彼我国人に魯行を勧むること甚切なり。已に去年幕府に迫り、幕生七人をして遂に行かしむ。過情斯の如し。彼の狼心あること更に云ふに足らん。世人多く魯國を指て強國とす。強は乃ち強なり。併し真の強に非ず。英米仏と更に較し難し。彼れ元來大地を有ち、殆んど世界の三分の其一を保つ。而して其寒最強く、不慣の外國人彼の地に入て鼻口を損すること甚數度なり。彼自ら強大を誇り外國を輕んずること余りあるも、實に寒國にして、不強國たる、往時を以て明らかなり。ナポレオン帝の魯を攻るや、魯兵四十万余、仏兵僅かに六万余、屢々戦ふて勝を得る能はず。追々奔竄の頃遂に最大なる都モスクーに攻入られ、なくなくも其最大の都府を悉く焼捨て、皆山林に逃避す。此時不幸にして仏兵糧道に乏しく、加ふるに寒氣嚴酷を以てし、仏兵忽ち四万余人悉く凍餓に死す。故に仏兵の生残り漸く馳歸るを得たり。

1. セバステポールの戦や、初め彼れ土耳其を奪ひ、地中海へ押出し、西洋諸國を苦しめんと欲す。故に英仏師を起して土耳其を救助せん為、或は其苦を逃れしめんが為、大にセバステポールにて戦ふ。魯國遂に敗走し、詮方なくも和親を英仏に乞ふ。而して仏帝主として之に應ず。其時英仏及外西洋諸國會して法を定めて、魯國再び黒海に艦墩を置くべ

7) 海門山人『森有礼』1897（明治30年）、16ページ。

8) 木村匡編『森先生伝』、1899（明治32年）、10ページ。

9) 森有礼は五男でなつたが、この兄は四男の元四郎安武で、横山家を嗣いだ。彼は明治3年7月、「時政の弊、征韓の非を集議院に投じて諫死した氣節慷慨の士」であつたという。大久保利謙『森有礼』1944、8ページ。

10) 以下においては漢字の字体を新字体に改め、仮名に濁りを加えると同時に句読点を若干あらためた。

からずと。魯国の不強のこと云はずして明らかなり。

1. 我国人多く魯国を指して義国といふ。是何ぞ汚なるの甚しき。乃ち土耳其奪掠の企て、先年ポーランド国を取りし事跡、又スウィスゼランド国の過半を奪略せし事跡、近くは対馬の件、不義不法の働き数え難し。其上、魯の国政皆国論にあらず、一切帝より出ず。故に不公平の政多し。帝明なれば治国、暗なれば国乱、皆其国人帝を以て神とす。何ぞ愚且不義の甚しきや。

1. 右は魯国の情実の大略追々観察仕候儀なり。猶又細事得る所あらば後書に可申上候。』¹¹⁾

われわれは以上の森の書簡の中に、ロンドン留学一年後の森のヨーロッパ近代史、国際関係史、とくにロシアの対外政策についての理解を明瞭に見てとることができる。彼はこの一年間に将来の「海軍測量術」の基礎たる数学や物理、化学を学ぶかたわら、すすんで国際政治について勉強したものである。その成果が上記の手紙にはよく現われており、これは留学生森の一年間の勉強のレポートともいえよう。それならば、森をしてこのようにヨーロッパの国際政治、とりわけロシアの外交について勉強せしめた動機は何であったのか。それを説明するのがいま引用した手紙の半年前に書かれた同じく兄にあてた書簡である。慶応元年12月3日の日付のあるこの手紙を、彼はつぎのように書き始めている。

「謹みて惟ふに、即今日本の状形、恐多くも天歩殆んど艱難にして、皇地已に外夷の咽を過んと欲す。』¹²⁾

森がイギリスに留学したのは、薩摩藩の藩命によるものであったが、その直接的なきっかけは、1863年の薩英戦争における自藩のみじめな敗北であった。薩摩藩はこの戦争において、イギリス艦隊の砲撃を前に何らなすところを知らず、近代的兵器の威力をまざまざと見せつけられたのであった。したがって、イギリスに留学した大部分の者の勉強の課題が、直接近代的な軍事技術の習得にあったことはたった今見た通りである。しかし森についていうならば、この兄あて書簡が示すように、欧米列強の極東進出に由来するかなり切迫した危機意識が、彼には早くから存在していたように思われる。はるばる海を起えて日本からイギリスにやって来た森が、ロンドン到着後ほどなくして兄に書いた手紙¹³⁾の中には、「何処も平安な」西洋から日本の「騒立」を見ていると、国の危難が迫っているこの時機に腕を拱いて座視するにしのびないといった苛立ちが見てとれるのである。江戸幕府が「器械其他諸物」の買入れを口実に、その実はフランスと結んで薩長に対抗せんと画策をめぐらしているニュースを、彼は「慨嘆」すべきことと兄に書き送っている¹⁴⁾。したがって森はロンドン滞在中に、ひとり自然科学のみでなく、現在の世界の情勢を出来るだけその目でくわしく見たいという気持を持ったようである。いま引用した慶応元年12月の兄あての手紙の中で、彼は将来国家にとって有為の人物となり「皇威」を「四洋萬国に及ぼす」ためには、現在の自分のおかれている立場を最大限に活用して「世界を周遊して其

11) 『森有礼全集』第2巻、52-53ページ。

12) 同書50ページ。

13) 同書47ページ。

14) 同書49ページ。(慶応元年九月一日付)

若き森有礼のロシア観をめぐって

国体は勿論、人情風俗を観察」することが「第一」であるとの確信を披瀝している。ここで森はロシアという国の名前こそ出していないが、おそらくこの頃から機会さえあれば日本の北辺に迫りつつあるロシアを直接その目で見てみたいという願望を抱くようになり、そのために積極的に（自然科学を専攻する学生としては異常なほど）ロシアについての情報を集めたのであろう。そしてその成果が上記の書簡となって表われたものと思われる。

森のロシアに関する情報源として考えられるは、当時のイギリスの新聞雑誌及び書籍と、もう一つは森ら薩摩からの留学生の面倒を見た下院議員ローレンス・オリファントが折にふれて語った話である。

しかしてその背景について見るならば、19世紀前半を通じて、ナポレオンとの戦争に勝利したロシアは、イギリスから見て大陸における最強の国であり、とくにヨーロッパにおけるバランス・オブ・パワーを崩す最大の可能性を持つ国として映っていたことを、まず指摘すべきであろう。さらにイギリス人にとって、ロシアの専制政治と農奴制とは、立憲政治と自由主義に真向うから対立するものと考えられ、外交面のみか、イデオロギーの上でもイギリスはロシアを嫌っており、*Russophobia* が伝統的に存在したことを忘れてはならない。しかもこのようなイギリスの「ロシア嫌い」に拍車をかけたのが、1830-1831年のポーランドの反乱の鎮圧と、さらに1849年のハンガリー革命の武力干渉であり、そのクライマックスが1853年から1856年にかけて戦われたクリミア戦争であったといえよう¹⁵⁾。

森がその書簡の中で「セバステポール大戦」と呼んでいるのが、このクリミア戦争を指すとはいうまでもない。しかしてクリミア戦争におけるロシアの敗北は森をして「魯国不強のこと云はずして明らかなり」との結論を出さしめたが、同時に中東におけるロシアの敗北が、ロシアを極東へ進出させることになるのではないかとの危惧を抱かした。当時のイギリスの新聞雑誌も、クリミア戦争の帰結であるパリ条約は、ロシアの進出を抑止する保証を与えないが故に満足すべきものではなく¹⁶⁾、さらに敗れたロシアが今度その鋒先を中央アジアや極東に向けるに違いないと予測したのであった¹⁷⁾。

はたしてロシアはパリ条約の二年後の1858年、清朝との間に愛琿条約を結び、アムール川（黒竜江）左岸の土地を獲得するとともにアムール、ウスリー、スングアリー三河川における航行権も得た。このときロシア側を代表して談判にのぞんだ東シベリア総督ムラヴィヨフは、ロシアが清国と共に排他的なアムール川渡航権を持たねばならぬ理由は、もっぱらイギリスがこの地方へ進出するのを阻止するためであると主張した¹⁸⁾。これも極東における英露の権益の抗争を示す挿話である。この一カ月後の同年6月、三年前に幕府との間に日露通好条約を結んだプーチャーチン提督もまた清国との間に天津条約を結んで、先に米英仏が清国から獲得した特権と同じ諸権利を確保した。このあとプーチャーチンは日

15) Breeze, L. E., *British Opinion of Russian Foreign Policy 1841-1871*, Ph. D. Dissertation, University of Missouri, 1960, pp. 2-3.

16) *ibid.*, p. 227.

17) *British Quarterly*; XXIV (1856), p. 219. *Blackwoods*, LXXIX. (May, 1856), p. 617, (June, 1856), p. 732. cf. Breeze, *op. cit.*, p. 229.

18) Seton-Watson, H., *The Russian Empire 1801-1917*. Oxford, 1967. p. 439.

本に向かい、8月には幕府との間に日露修好通商条約を締結し、箱館に領事館を開設して、初代領事にゴシケーヴィチを任命した。森はその正味わずか11日間の露都滞在中に、プーチャーチンともゴシケーヴィチとも会い、その双方から自宅に招待されて親しく会談している。

なおこの書簡の最初の所で森がロシアの良港としてあげている「ペートルビル」とはカムチャツカ半島のペトロパヴロフスクを指すのであろうか。もしそうだとすれば、ここはロシアが極東及び北アメリカに進出した際の主要な基地で、クリミア戦争中の1854年8月、英仏連合艦隊の攻撃を受けたロシア側が、劣勢にもかかわらず白兵戦にもちこんで英仏軍を撃退した有名な軍事基地でもあった¹⁹⁾。

つぎにローレンス・オリファントの人物と、その森ら留学生に及ぼした彼のロシア観を見てみよう。森の伝記研究者がこぞって指摘しているように、薩摩藩の留学生に与えたオリファントの影響はすこぶる大きかったが、とくにそのロシア観は森に決定的な影響を与えたと思われる。

オリファントは1829年に南アフリカのケープタウンに生まれ、ロンドンで法律を学んだあと、『デイリー・ニューズ』や『タイムズ』の通信員として一時クリミア戦争に従軍したという。彼がこの戦争について森らに語った事実は、つぎの松村淳蔵の回顧談からも明白である。

「又曰く、魯が黒海を出て地中海に入れば到底英国の力にては抑へ難し。故に仏と同盟して爰に魯を押へ、彼をして地中海へ出でしめざるを策せり、それ英国自衛の為めなりと語れり。」²⁰⁾

オリファントはその後カナダ総督エルギン伯の秘書に任命され、1858年天津条約批准のため清国に赴く伯に従って初めて東洋を訪れた。彼はそのあとエルギン伯が日英修好通商条約の調印交渉のため日本に行った時にも随伴し、約三週間日本に滞在した。帰国後彼は1859年にこの時の見聞記²¹⁾を出版した。その後彼は外務大臣ジョン・ラッセル卿の推薦で駐日イギリス公使館の一等書記官に任ぜられ、1861年に来日した。しかし同年7月5日、水戸浪士による英公使館襲撃事件（いわゆる東禅寺事件）で腕に重傷を負い、治療のため帰国のやむなきに至った²²⁾。

このあとオリファントは傷が癒えてから1865年に下院議員に選出されるまで、再びヨーロッパ各地を旅行したが、ここでとくに注目しなければならないのは、彼が1863年のポーランドの蜂起を自ら親しく見聞したという事実である²³⁾。

このポーランドの反乱に際して、イギリスの世論はこぞってポーランドに同情を寄せ、

19) Stephan, J., "The Crimean War in the Far East", *Modern Asian Studies*, III, (July, 1969), pp. 257-277.

20) 「海軍中将松村淳蔵洋行談」『森有礼全集』第2巻, 384ページ。

21) Oliphant, L., *Narrative of the Earl of Elgin's Mission to China and Japan in the Years 1857, 58, 59*. N. Y., 1859. 本書の日本関係部分が『エルギン卿遣日使節録』, 岡田章雄訳, 雄松堂, 1968である。

22) 犬塚孝明『薩摩藩英国留学生』, 中公新書, 70-73ページ。Hall, *op. cit.*, p. 86.

23) 犬塚, 同書, 73ページ。

若き森有礼のロシア観をめぐって

ロシアに対する憎悪をかき立てた。とくに反乱の直接的原因が、新しい徴兵制度によって反ロシア的なポーランドの若者を監獄の代わりに軍隊に投じたことにあったことは、イギリス人にとって許し難いように思われたのである。『タイムズ』紙などは、かかる「野蛮な」徴兵によって、ロシアは意図的にポーランドに蜂起を惹起させ、それによってポーランド問題を一挙に解決せんと狙っているのではないかとの疑惑すら示した²⁴⁾。しかし具体的にイギリスがどのような対ロシア政策を取るべきかとなると、ジャーナリズムの論調には一致した見解は見られなかった。『マンチェスター・ガーディアン』などがロシアに対する憎悪をむき出しにして、たとえ戦争という事態を惹起しても、イギリスは断固とした態度を取るべきだと主張したのに対し、『タイムズ』はポーランドに深い同情を示しながらも、ポーランドを救う具体策がイギリスには無いことを認め、『クォータリー』はポーランドが「より改善された条件」のもとで依然としてロシアの統治下にあることをめざすべきだと主張した²⁵⁾。

事実ロシアのポーランド蜂起弾圧に対して、イギリス政府は、オーストリア、フランスとともにロシア政府に対して抗議文を送り、ウィーン条約で約束されたポーランドの憲法の制定と、反乱参加者に対する恩赦を要求するにとどまった²⁶⁾。しかしイギリスの議会では、下院にあってはポープ・ヘネシー (Pope Hennessy) がポーランドに対する積極的援助を政府に要求し、上院においてはシャフテスバリー伯 (the Earl of Shaftesbury) がポーランドのロシアからの分離独立のための政府の措置を求めた。しかし首相パーマストンのナポレオン三世に対する不信から、イギリスはフランスと手を携えて国際会議を召集する努力もせず、外相ラッセルは「ポーランドのために武力干渉を行うことは何ら利益をもたらさないであろう」として、事態のなりゆきを見送ったのであった²⁷⁾。

ローレンス・オリファントが政界に進出する決心を固めたのは、まさにポーランドの反乱に対してロシアが武力で鎮圧を加えつつあった1864年のことであった。このような彼のロシア嫌いについては、松村淳蔵がつぎのように回想している。

「『ヲリハント』の談にも魯は平和を紊す国にて、実に好かぬ国柄なり、甚奸猾にして油断の出来ぬ処なりと口を極めて之を攻撃せり。」²⁸⁾

「『ヲリハント』常に語るに、魯国は余程用心すべし。前年(文久元年四月対馬占領事件)予が日本に駐在せし際に、魯艦対馬に至り一部を占領せし事あり。徳川政府の依頼に依り公使の命を含み対馬に至り之を取戻したる事あり。今後同様の事ありては至難ならん。好く心を用ゆるべしと。魯人を悪むこと太たし。又魯人は何事にて人見に立つことを為せば重く褒賞する国柄なれば、人々も思切つて種々の事を為す風なりと。曰く、魯は外交に巧にて狡猾極まれば一寸の油断も出来ず。凡そ今日の外交とは半ば虚偽で半ば正直に為さ

24) 『タイムズ』1863年2月21日、3月3日。Cf. Breeze, *op. cit.*, p. 286. Thorn III, W. H., *Russia and the British Periodical Press 1856-1903; A Study of Attitudes Toward Russian Internal Affairs*, Ph. D. Dissertation, The University of Rochester, 1968, p. 237-239.

25) Breeze, *op. cit.*, pp. 292-295.

26) *ibid.*, p. 288.

27) *ibid.*, p. 290-291.

28) 『森有礼全集』第2巻、382ページ。

ざるべからず。全く虚偽のみにては他より信ぜず、全く正直のみにては他に愚弄せらる。此呼吸中々肝心なり。故に東洋風と異なるは強きものとは結べ、弱きものは潰せよと云ふが、これが外国の気風なり。日本で云へる義侠と謂ふが如き事は知らざるに似たり。」²⁹⁾

この松村の回顧談から、われわれはオリファントが森や松村にロシアについてどのように語ったかを知ることができる。そしてその語るところは、若き森におそらく決定的な影響を及ぼしたに相違ないと推測される。

この回顧談の中で松村はまたオリファントの言ったこととして、「又如何なる事情あるも国を抵当として外債を起すべからず、一旦為す時は終に其国土を奪はれん。是尤も由々しき大事なればなりと」³⁰⁾という言葉を用いている。これに関していえば、これより五年後に弁務使としてアメリカにあった森が、外債募集の件で日本政府と対立し、四面楚歌に陥りながらも最後まで外債反対を貫ぬいた事実³¹⁾にも、オリファントの影響を見てとることができよう。

しかし森の兄あて書簡のなかには、1863年のポーランドの反乱は触れられておらず、ただ「先年ポーランド国を取りし事跡」と記して、18世紀末のポーランド分割について簡単に述べているにとどまる。さらにこのすぐあとで森は、「又スウイスゼランド国の過半を奪取せし事跡」と書いているが、これがロシアがスイスの領土の半分を獲得したという意味ならば事実と反する。おそらくこれはスイスではなく、スウェーデンの記憶違いであろう。ロシアは1808-1809年にスウェーデンと戦ってフィンランドを獲得し、ロシア皇帝はフィンランド大公をも兼ねることになった。

次に森が述べている「又偶々印度を襲わんと欲して能はず」というのは、1801年にパーベル1世が2万のドン・コサックにインドに侵入することを命じた事実を指すものと思われる。これは広く世に知られた愚挙であって、命令はパーベルの暗殺後即位したアレクサンドル1世によって中止されたが、四十連隊ものコサックの大隊が、国境も越えないうちにその馬の半分を失なるとつたえられる³²⁾。このあとロシアがイギリスのインド支配へ圧迫を加えるのは19世紀の70年代以降のことであって、これは森の手紙の書かれた後の時代に属する。

このように森のロシア近代史に関する記憶は必らずしも正確とはいえないが、この書簡にはロシアが不凍港を求めてアジアに進出し、とくに中東で敗れてからは極東へ進出するようになった経過が、身近かなことだけに、詳しく述べられている。しかしここにも事実の誤認が見られる。それは「終に漸く我に迫り已に蝦夷地の過半を奪ふ」と述べている件である。

1859年(安政6年)8月、シベリア総督ムラヴィヨフはフリゲート艦アスコリドに坐乗し、七隻から成る艦隊を率いて神奈川に上陸した。すでに彼は箱館から書面を幕府の老中に送って、自分はロシア皇帝の命に依りサハリンの境界を画定すべく来日したので、日本

29) 同書、384ページ。(括弧内は原文)

30) 同書、384ページ。

31) 大久保利謙、前掲書、41-55ページ。

32) Корнилов, А., *Курс истории России XIX века* ч. 1, М. 1912, стр. 70-71.

若き森有礼のロシア観をめぐって

側も委員を任命して準備されたいと伝えていた。約40名の士官と300の武装した水兵を率いて品川に上陸したムラヴィヨフは、7月26日と8月2日(新暦)の二回にわたって幕府側と談判に及んだ。この時の彼の主張は、サハリンはその名が示す如く(サガリエン・アンガ・ハタ)、昔からアムール地方に属するが、このたびの清国との条約によってアムール地方はロシア領となったので、当然サハリン全島もロシア領に含まれるものと理解する、というものであった。これに対し日本側は、サハリンは「往古より我国の所領」であり、そこにはアイヌ人が昔から住んでいるが、アイヌ人の住むところは日本領であると反論して、サハリン全島は1855年の下田条約(日露通好条約)第二条の取り決めにある如く日露共同領有とするか、さもなくば北緯50度を以て双方の国境とするよう提案した³³⁾。結局この時は両国の主張が噛み合わぬままに終わったが、日本がサハリンの共同領有権とウルップ島以北のロシアの千島列島領有権と交換するのは、森の手紙の九年後の1875年のことである。したがって森の記述は正しくないが、ロシア側がムラヴィヨフの江戸来訪の前後からサハリン島に兵を派遣して、日本側を圧迫していたのは事実であり、当時多くの日本人は森のように認識していたのであろう。

この先で森は先年日本人がロシア人を殺害した事件について触れているが、これは今述べたムラヴィヨフの第一回談判の翌日、神奈川で起こった事件のことである。この時、買い物帰りのロシアの海軍少尉モフェートと水兵ソコロフの二人が、水戸浪士と推定される何人かの日本の侍によって斬り殺された。これは日本が開港してから初めて起こった外国人の殺害事件であった。しかもこれは単なる物盗り強盗ではなく、初代註日イギリス総領事オールコックが主張したように、明らかにそこには「政治的意図」があった³⁴⁾。オールコックは強硬な態度で事件にのぞみ、率先して在日外国人の生命の保全を幕府の閣老に要請した。一方この時ムラヴィヨフは、(1)幕府側の謝罪。(2)神奈川奉行の罷免。(3)犯人のすみやかな逮捕とそのロシアの将兵の前での処刑。の三点を要求し、賠償金の請求はしなかった。これに対し幕府側は、前二点はただちに実行したが、犯人の逮捕・処刑については、目下捜査中であり、アスコリドの出帆後これを捕えた時は、ロシア領事の指定する所で処刑する旨答えて、一応この件は落ち着いた。

しかしプーチャーチンに比して、はるかに高圧的でサハリンの全島領有を狙っていたムラヴィヨフが、なぜこのとき事件を利用することなく、以上のような穏やかな条件で引込んだのか、未だに疑問がないわけではない。事実当時わが国では、ムラヴィヨフの部下の士官が幕閣に対し、サハリンの割譲を要求したとの噂が流れた³⁵⁾。しかし事實は、領土の要求はおろか、ムラヴィヨフは「ロシアはその臣民の血を売るようなことはせぬ。」といて、賠償金の要求すらしなかったのであった³⁶⁾。

このあたりに、森が書簡の中で書いている「我国人多く魯国を指して義国といふ」という事の背景があったのかも知れない。翌年オランダ商船長デ=ボスら二人の外国人が殺され、幕府は初めて賠償金を支払う破目になり、以後この種の事件が続いて、生麦事件

33) 太田三郎『日露樺太外交戦』1941, 96-105 ページ。

34) オールコック, 『大君の都』, 山口光朔訳, 岩波文庫, 上巻, 355-362 ページ。

35) Lensen, G. A., *The Russian Push Toward Japan*, Princeton, N. J., 1959., p. 387.

36) *ibid.*

(1863)の際には賠償金として44万ドルもの支払いを余儀なくされることになる。

しかしロシアを「義国」と見るということに関していうならば、日本には「ロシア脅威論」と並んで、「ロシア鼯鼠」も伝統的にあったことも指摘しておかなければならないだろう。幕末の仙台藩の洋学者、大槻磐溪は「魯西亜と英吉利との事を幼い時から耳に留めて居られ、魯西亜は隣国ではあるし大国ではあるし、二度までも使節をよこし漂民をかへず、誠に律儀な国だ、親切な国だ……此時から明治の初めまでロシア鼯鼠」であったと『磐溪事略』はつたえている³⁷⁾。このほかプーチンが日本との交渉に当って、日本の古くからの法を尊長して長崎に来航し、おだやかに交渉を進めたことは、艦隊を率いて江戸湾に入り、武力で開港を要求したアメリカのペリーとは著るしい対照をなすもので、この点でもロシアの評判はよかったという。

しかし森はこのようなムラヴィヨフに代表されるロシア側の穏健な態度を、あくまでも日本の欲心を買うための策略であり、その実は、「猫知を抱き鷲爪を蔵して外容頻に神妙を飾り内には狼心」を秘めているのだと見てとる。ここにはオリファントが自分たちに語った「魯は外交に巧みにて狡獪極まれば一寸の油断も出来ず」という忠告に忠実な姿勢がある。

そのような森が、ロシアが日本の欲心を買うべく行った第二の懐柔策として述べているのが、幕府留学生のロシアへの派遣である。森たち薩摩藩の留学生がイギリスへ向って出発した三カ月後の慶応元年(1865)7月に、幕府は緒方城次郎(22歳)、市川文吉(19歳)、大築彦五郎(16歳)、田中次郎(15歳)、小沢清次郎(13歳)の五人に、監督として箱館奉行支配調役並山内作左衛門(30歳)を付けてペテルブルグへ派遣した³⁸⁾。後に見るように、森は露都に到着したその日に彼らと会っており、山内とは国際情勢の認識で見解が一致し、意気が投合した。森の露都訪問の一つの目的が、これら幕府留学生と会見することであったと思われるが、森は上記六名中、山内、緒方、市川以外の三名は「乳児なり」との印象を得て、まったく問題にもしなかった。

彼ら幕臣のロシア留学は箱館駐在のロシア領事ゴシケーヴィチの進言によるものであった。彼が江戸に出て来た折、開成所において英独仏語を学ぶ者に比して、ロシア語を学ぶ者が著しく少ないのを遺憾に思っ、ロシアへ留学生を派遣する必要を幕閣や外国奉行に説いたことがきっかけになっていた³⁹⁾。しかし留学生の選考は、同じく幕府が翌年にイギリスに派遣した留学生の場合にくらべるとやや「杜撰」⁴⁰⁾であり、年齢も平均してはるかに低かった。

彼らは翌1866年2月にペテルブルグへ着き、山内は幕府から預った「諸入費」として、メキシコ銀で1万5千ドルを露都に帰国していたゴシケーヴィチに託した。そしてゴシケ

37) 吉野作造『露国帰還の漂流民幸太夫』, 1924, 36-37 ページ参照。

38) 留学生の年齢は、原平三「我が国最初の露国留学生に就いて」, 『歴史学研究』10巻6号(1941), 643-644 ページによる。森の『航露紀行』では小沢の年齢が一歳多くなっている。『全集』第2巻, 20 ページ参照。

39) 内藤遂『幕末ロシア留学記』, 1968, 5 ページ。

40) 同書18 ページ。

若き森有礼のロシア観をめぐって

ーヴィチの家の近くに一軒借りて、女中二人と下男一人を使って共同生活を始めた。しかしゴシケーヴィチは、外務省へ納入した「諸入費」から、留学生一日の生活費として一日に「三両五分」も取りながら、彼らのために入学の手続きを取ることもせず、また共同生活ではロシア語が上達しないから分宿したいという願いも無視しつづけたといわれる。この点に関して内藤遂は、ゴシケーヴィチが留学生がロシアの事情にうといことをよいことに「これを籠絡したと思われる跡が多分にうかがわれる」と述べている⁴¹⁾。しかし露都を訪問した森に対するゴシケーヴィチの歓待から推量して、彼はそれほど悪意のある人物のようにも思われず、おそらくロシア人一流の「なにごととんちゃく致さぬ」⁴²⁾性格から、留学生の世話をあまり見なかったというのが真相であろう。さらにいうならば、当時のロシアには外国人留学生はきわめて少なく、留学生の扱いに当局が慣れていなかったという事情も考慮する必要がある。だからといって、森たち薩摩藩の留学生の世話をし、大学や自宅において勉強のためになにくれとなく世話を焼いたロンドン大学教授アレクサンダー・ウィリアムソンや、ローレンス・オリファントの親切さとは比肩すべくもないことは確かである。

しかしここでロシア側の怠慢のみを責めるわけにはゆかない事情もあった。幕府がこれら留学生のことを正式にロシアの外務大臣に依頼したのは、留学生が出発してから一年二カ月後のことだったからである。この依頼状の中で幕府は、留学生派遣の目的として「政治文章より風俗言語に至るまでの学業」と「政治並びに海軍諸学科等」⁴³⁾の習得をあげているが、これはオランダやイギリスにおける留学目的と同じである。そして山内が露都到着後半年たった手紙によれば、五人の留学生中「緒方は精密術、市川は金銀石炭山の学、小沢は器械学、田中は海軍学、大築は未解」という予定を立てていたが⁴⁴⁾、本格的にこれらの課目を勉強できた者は一人も居らず、ロシア留学の成果を生かし得たのは、後に外国語学校のロシア語教授となる市川文吉だけであった。

つぎに森がロシアの対馬占領の意図を述べている件について見てみよう。ローレンス・オリファントもこのことに言及していることはすでに見たが、この対馬事件は、当時の極東における英露の対立をまざまざと示すものであり、日本にとっては国防上の大事件と見なされた出来事であった。

ムラヴィヨフの江戸来訪の翌1860年、ロシアは清朝との間に北京条約を結んで、ウスリー川から太平洋へ至る広大な地域を獲得するとともに、ウラジヴォストークの建設に取りかかり、従来以上の極東への進出を着々とすすめた。イギリスの『ノース・ブリティッシュ』は、この北京条約によって、ロシアは全ドイツと等しい面積を「くすねた」⁴⁵⁾と指摘したが、『クォーターリー』もこの条約によってロシアは日本との関係において「最も有利な地位」を占めるに至ったと述べ、遠からずロシアはサハリン全島を自国領にするのである

41) 同書 42 ページ。

42) 同書 39 ページ、山内の言葉。

43) 同書 12 ページ。

44) 同書 40-41 ページ。

45) 1860 年、23 巻、Cf. Breeze, *op. cit.*, p. 27.

うと予想した⁴⁶⁾。この年二月に特命全権公使に昇格したオールコックは、かかるロシアの行動が通商の拡大をめざすものではなくて、「軍事的優勢」を目的とするものであって、もしもここでイギリスを初めとするヨーロッパ諸国が後退するならば「日本が遠からずロシア帝国の一部となることはほぼ確実」であるとまで述べている⁴⁷⁾。

このような状況の中で、翌1861年、ロシアの軍艦ポサードニクが艦長ビーリレフに率いられて対馬に入航した。島に上陸したロシアの将兵は、材木を伐採して宿舎を建て、島民一名を殺害し、数名を捕虜として艦内に捕え、更に艦長ビーリレフは対馬藩に対して昼ヶ浦より竿崎までの土地の借用を要求した⁴⁸⁾。対馬からの報に接した幕府は外国奉行小栗忠順らを派遣してポサードニク号の退去を求めたが、ビーリレフはこれに対して、このたびの対馬寄港は司令長官リハチョーフの命によるものであり、上司の命がなければ退去出来ないと居続けた。かくて幕府は箱館奉行村垣範正に命じてゴシケーヴィチと交渉させ、露艦の退去をゴシケーヴィチよりリハチョーフにつたえるよう依頼した。これに対しゴシケーヴィチは、自分はこの件は何も知らず、速やかにリハチョーフに連絡をとり、その釈明を求める旨を答えた。しかしゴシケーヴィチにとって対馬の問題はこの時が最初ではなかった。先年イギリスの軍艦が対馬において測量を行った時、この事実を知った彼は幕府に対して、イギリスの対馬占領の可能性を説き、日本政府は直ちに対馬に砲台を築いて防備を固めるべきであり、必要とあらばロシア政府が援助しようとして申し出たことがあったからである⁴⁹⁾。このように対馬は早くから英露両国の勢力の拮抗する所であり、このたびのポサードニク号の寄港を知ったイギリス側は、直ちに行動を開始した。即ち、オールコックは英東洋艦隊司令長官ジェームズ・ホープに軍艦二隻を率いて、直ちに対馬に赴くよう命じた。8月27日に対馬に着いたホープは、ビーリレフに対し、ロシア艦の行動を遺憾に思っている旨をつたえるとともに、強い調子の抗議文をリハチョーフ長官に伝達するよう要求した。このようなイギリス側の圧力と日本幕府の抗議、さらに日本との友好関係を損ないたくないと思っていたゴシケーヴィチの忠告とによって、リハチョーフは軍艦オブリーチニクを対馬に派遣して、ポサードニク号に退去を命じた。しかし今度はオブリーチニク号が居残ったため、再度軍艦アブレークを派遣して、ようやく対馬に残っているすべての将兵と艦船の引上げを終らすことができた⁵⁰⁾。

以上において、森の手紙に述べられたロシアの対外政策について、その歴史的背景を見て来た。そしてそこに当時のイギリスの世論やローレンス・オリファントのロシア観が大

46) *ibid.*, p. 275.

47) オールコック, 前掲書(下), 97-98 ページ。『エディンバラ』は、『大君の都』を書評して、このようなオールコックの見方には必ずしも賛成できないが、「しかしロシアは日本の最も近くで最も恐るべき隣人となった」と述べ、ロシアの狙いが不凍港を獲得することになると書いた、(1863年, 第67号, 537 ページ) Cf. Breeze, *op. cit.*, p. 275.

48) 斎藤清太郎「維新前に於ける日露の交渉」, 史学会編『明治維新史研究』, 1929, 254-255 ページ。外務省編『日露交渉史』, 1944, 35 ページ。Lensen, *op. cit.*, pp. 449-450.

49) 綱津正志「文久元年露艦ポサードニクの対馬占拠について」, 『法と経済』第2巻2号(1934), 88 ページ。

50) 高田利吉「幕末露艦の対馬占拠」『歴史地理』第43巻第1号(1924), 21-26 ページ。

若き森有礼のロシア観をめぐって

大きく影響している事実を検討した。

この手紙の中で森は、当時の日本にひろく見られたロシア脅威論に対して、クリミア戦争におけるロシアの敗北や、対馬占拠の失敗等の事例をあげて、ロシアは英米仏に比べれば真の強国ではないと主張し、その強さをもっぱらその国土の広大なること、寒気がきびしきために外国の軍隊が攻めても最終的勝利が得られないという事実に帰している。そして最後に、ロシアの伝統的外交政策が不凍港を求めての進出と対外的侵略にあるとして、「何ぞ汚なるの甚だしき」「不儀不法の働き数え難し」と口をきわめてロシアの対外政策を酷評している。

それならばロシアの内政については、彼はどのように見ていたであろうか。この点については、「魯の国政皆世論に非ず一切帝より出ず。故に不公平の政多し。帝明なれば治国、暗なれば国乱。皆其国人帝を以て神とす」と記し、ロシアの専制政治をとりあげて、結論として「何ぞ愚且不儀の甚しきや」とこれまたきびしい調子でもって文を結んでいる。この点は後に明治政府の文相として、忠君愛国の国家主義的教育を鼓吹し、近代天皇制の確立にすくなからぬ役割を果たした森の行動と重ね合わせるとき興味なしとしないが、ここではこのようなロシア内政観も、当時のイギリスの世論と一致するものであったということを示すにとどめておこう。

クリミア戦争とそこにおけるロシアの敗北は、ロシアの皇帝や官僚だけでなく、イギリス人に対してもロシアの欠陥がどこにあるかを、従来よりも明瞭に示すところとなった。イギリスの新聞の特派員として数年間モスクワに滞在したエドワーズのルポルタージュ⁵¹⁾や、ハクストハウゼンのドイツ語の著作やドルゴルーコフ公のフランス語の著作が英訳出版されたことによって⁵²⁾、イギリス人は従来よりもロシア社会の実状をかなりよく知ることが出来るようになった。たしかにゲルツェンがロンドンで発行していた『鐘』は、言葉の上の障害からイギリス人に読まれることはほとんどなかったが、しかし保守的なこの国の新聞でさえも、なぜゲルツェンがこれほど激しくロシア政府を非難しているのかという点についてはかなり正しく読者につたえていた⁵³⁾。しかしそれにもかかわらず、とくに「人気のある」新聞や雑誌においては、反ロシア的の偏見が強く見られ、『チェムバーズ・ジャーナル』やディッケンズの『ハウスホールド・ワーズ』といった雑誌に描かれるロシアの特徴は、つねに「残忍で野蛮で後進的」であり、ロシア外交の究極的目的は「世界を従えんとする唯一の偉大な目的」にほかならず、しかしてその内政は「一人のツァーリがすべてに君臨し、賄賂がはびこり、政治的・道徳的脅敗」が瀰漫しているといった類のものであった⁵⁴⁾。これらはたった今みた森のロシア観とまったく軌を一にするものである。

イギリスのジャーナリズムがとくに非難したのは、ロシアの官僚制と農奴制であった。したがって一般にイギリスの新聞・雑誌は1861年3月15日の農奴解放令を好意的に評価

51) Edwards, H. S., *The Russians at Home*, London. 1861.

52) Baron von Haxthausen, *The Russian Empire. Its people. Institutions and Resources*, 2 vols, London. 1856. Prince Dolgoroukov, *A Handbook of Principal Families of Russia*, 1858.

53) Thorn III., *op. cit.*, 78-79.

54) *ibid.*, pp. 81-82.

し、これが農民にとって寛大なものであると紹介した⁵⁵⁾。しかしその後のポーランドの反乱とこれに対するロシア政府の弾圧が、イギリス人の目をロシアの内政から外政に逸らせることになる。

しかし森がイギリスの「人気のある」新聞・雑誌ばかりでなく、客観的にロシアの実状をつたえようとするものも読んでいたことは、『航魯紀行』の冒頭で、イギリスとロシアの貿易を数字をあげて論じているところからもうかがえる。森がロシアへ旅立つ直前に出た『エコノミスト』の1866年2月24日号は「われわれのロシアとの貿易」⁵⁶⁾という論文を掲載したが、それはロシア政府の諸改革を評価し、「イギリスはロシアがとったすべての前向きの措置をすすんで評価したい」と述べていた。

以上見たように、森は兄あての書簡の中で、紙面のほとんどをさいてロシアの外交と内政を批判しているが、その末尾では米国の政治について次のように述べている。これは当時の森の考えを知る上できわめて興味あるところである。

「米国は今開国を去ること漸く二百年、国家の政大小となく悉く萬民と謀り公平正大の政事をなす。只今世界に於て突然たる事世人皆知る所なし。尤西洋人皆云ふに後世起る所米なりと。殊に英人は米人を諱候得共是亦同説なり。御照察可被下候。私竊かに勘考仕候に、俱に親交を結び有無を通ずる所此国なりと着眼仕候。此国当時外国に念を掛け候儀曾て之なし。故に彼の国四年間永戦此頃漸く治まり、國中未だ一統せず。其上後背には総て英の領分有之、脇にはメキシコありて、腹心の病未だ癒えず。先づ是等を一統して然る後四方に手を振ふべし。未だ外念なき事御照察可被下候。」⁵⁷⁾

ここにおいて明らかなように、19歳の森はロシアの専制政治とアメリカの議会政治を比較し、さらに南北戦争後のアメリカの将来の発展を予測して、日本がこれと「親交を結び有無を通ずる」べきだと主張しているのである。彼はアメリカが内戦後間もなく、国の統一もままならぬ上に、近隣に問題の国々を抱えていて、これらの問題を解決し終るまでは、ロシアのように日本に直接的圧力を加えてくることはないだろうと予測していたのである。さらにこの手紙を書いた維新前夜の日本の政治状況を考えるとき、森は日本がアメリカを見習って一日も早く内乱を克服しなければ、すぐ咽元にまで迫った外敵から国を守ることが難しくなると考えていたと想像される⁵⁸⁾。

先に述べたように、森は将来国のために尽すためには、広く世界を見る必要があると留学当初から考えていたが、留学第二年目の夏休みに、松村淳蔵と二人、前後四十日をかけて露都を訪問する旅に出発した。この時ロンドンに在った薩摩藩留学生中、鮫島尚信と吉田清成(ともに20歳)の二人はオリファントに伴われてアメリカへ行き、畠山義成(26歳)はフランスで夏休みを過ごした。この時アメリカへ行った二人は、オリファントと共に彼が私淑するトーマス・レイク・ハリスをそのニューヨーク州アメニアにあるコミュニティーに訪ねたが、森は翌年鮫島らとともにこのハリスの教団に入り、そこのブドー園で働らく

55) *ibid.*, pp. 86-89.

56) "Our Trade with Russia", *Economist*. XXIV. Cf. Thorn III., *op. cit.*, p. 155.

57) 『森有礼全集』第2巻, 53-54 ページ。

58) 慶応元年12月3日付のあて書簡参照。

若き森有礼のロシア観をめぐって

ことになる。

(3)

森が松村と共にロンドンを出発したのは1866年8月1日のことであり、帰ったのは9月10日であった。しかしこの旅行の大部分の日数は往復の船旅で費やされ、ペテルブルグに滞在したのは8月24日から9月2日までのわずか11日間に過ぎない。旅程はロンドンよりニューカッスルまで船で行き、ここから8月8日に「ジョージ・アンド・エミリー」という名の三本マストの船に乗船して出帆、途中どこにも寄らずに8月23日にクロンシュタットの港に着いている。帰りはクロンシュタットを9月3日に発って、9月10日ハルに到着、ただちに汽車に乗りかえて同日夜ロンドンに帰着した。『航魯紀行』にはニューカッスルにおける森の興味ある見聞が記されているが、いまは触れない。森のロシアについての記述はクロンシュタットから始まっている。

まず初めに森はクロンシュタットの地理並びに軍港としての歴史と現在の防備について詳述したあと、ロシアのイギリスとの貿易についてつぎのように記している。

「此港内常に商船盛にして、二千艘位は絶ずとぞ。内千五、六百艘は英船也。英の商の盛又知るべし。英国よりは主に石炭を持来す。魯国よりは獣脂・苧麻・穀物・獣皮・財木等也。内に麦と獣脂とは重り、1864年の惣算に、外国より持来せし物価、都合13億ポント、我金にして凡そ39億両に当る。魯国より売出す物価、わずか7億とぞ。我金にして21億両。然れば魯商の下手なること知るべし。元来魯人は西洋におひて較れば、いまだ田舎人ゆへに、たまたまよき産物を以ていても、自ら其品をよくこしらへる事能はず。外国にやすく売って外国人それをよくこしらへ、又魯国へ持来して高く売りつけると聞けり。」⁵⁹⁾

森はここで1864年度のロシアの輸出入額をあげて、その大幅な赤字を指摘し、そこからロシアが商売「下手」であると結論しているが、これには疑問がある。というのは1861年から1865年までのロシアの年平均輸出額2億2,600万ルーブルに対し、年平均輸入額は2億700万ルーブルで1,900万ルーブルの黒字だからである⁶⁰⁾。森はポンドで表しているが、これはイギリスの資料から得た数字だからであろう。しかし輸出が輸入の5割強であるというのは不自然である。さらに輸出入の品物についてみても疑問がある。1850-1860年当時クロンシュタット港から程出されるロシアの重要な輸出品としては、亜麻・リンネル(年間1,140万ルーブル)、獣脂(1,120万)、穀物(997万)、麻及び麻製品(565万)、材木(263万)、金属(235万)といったところであり、これに対して輸入は、綿花が第一位で(1,414万ルーブル)、ついで工業製品(944万)、染料(557万)、ブドー酒並びに蒸留酒(527万)、植物油(232万)、羊毛(217万)といった順序であった⁶¹⁾。とくにイギリスへは、1846年の穀物法の廃止以後ロシアからの小麦の輸出が倍増したといわれ

59) 『森有礼全集』第2巻、17ページ。

60) Florinsky, M. T., *Russia: A History and an Interpretation*, vol. 2., N. Y., 1953. p. 938. *The Statesman's Year-Book* の1872年版によれば、1865年のロシアの輸出額は2,982万ポンド(2億925万銀ルーブル)に対し、輸入額は2,341万ポンド(1億6,430万銀ルーブル)である。p. 384.

61) Parker, *A Historical Geography of Russia*, Univ. of London, 1968. p. 250.

る⁶²⁾。これに関して、森の露都訪問の7年後にペテルブルグを訪れた岩倉使節団は、1870年の数字としてロシアの輸出額として2億4,489万ドル、輸入2億2,750万ドルをあげ、さらに輸出品の主なものは穀物であり、しかもその半分はイギリス向けであると述べている⁶³⁾。したがって森が記している「内に麦と獣脂とは重なり」というのはおかしい。しかしロシアが原料を輸出して製品を輸入するという貿易構造は、森がここで指摘している通りである。しかもこれは19世紀後半だけでなく、昔から20世紀後半の現在まで変わっていない。しかしこれをもって「いまだ田舎人」のせいだと思えるのは一つの価値判断である。そしてこのような価値判断が当時のイギリスのそれから来るものだという事は容易に想像される。

次に政治について森はどう見ていたか。この点に関して彼はクロンシュタットに到着した日につきのように記している。

「此国は政法両ながら酷にて、且奇也。米英等と同日の論にあらず。初め此国に入る哉、国の大禁を問ふに政事の談論を切に禁ずと。其他許多あり記し難し。」⁶⁴⁾

この点は松村淳蔵もよほど強い印象を受けたと見えて、その「洋行談」の中に以下のように語っている。

「魯国『コンスタント』港に著す。同港碇泊の船舶実に夥しく、恰も葭藪に入りたるが如き感を為せり。魯船に乗替へて魯京に行けり。当時未だ鉄道はなし。魯の政策にて同港より内に外国船を入れざる国法にて、特に浚渫もせず大船を通せしめずと聞けり。船中の話に、魯に行ては決して政事上の談はなすこと勿れ。無暗に捕縛さる処なればと度々戒められたり。」⁶⁵⁾

森たちよりも27年前ロシアに入ったフランスのキュスティーン侯は、ロシアに入国したとき、入国の目的や滞在期間等について、再三同じ質問責めにあつて閉口したが⁶⁶⁾、今回の森や松村はこの点は免れたらしい。しかし彼らが露都に入ったわずか四カ月前には、25歳の学生カラコーゾフによる皇帝暗殺未遂事件(後述)があつたりして、とくに政治的な発言は警戒しなければならなかつたのであろう。しかもロシア国内で発言を封じられただけに、『紀行』の中で森は思い切って次のようにこの国の政治を批判している。

「此国では事々物々皆帝の意にまかす。人民また帝を尊ぶ事神仏の如く、殆ど和漢の風習とひとし。国の開けざる事知るべし。此已前に帝の威力まだ盛んにして、諸民帝に逢ふ時は伏而帝の足を取り、恐怖して舌を以てなめる事とぞ。此習はしは帝にかぎらず、重立たる頭人へは下よりは同様に致せしとぞ。今其弊なし。また米国の南方に用ひし如きスレーブ(錢ヲ以テ買レル人)を用ひし由、是亦今なし。当時追々『リバチー』(寛政)におもむくとぞ。其上帝は甚だ仁徳天性にて、今迄の奇政を大に变革之由、ゆへに当帝之

62) *ibid.*, 尚1864年のイギリスの対露輸出は285万ポンドで、ロシアからの輸入は1,471万ポンドであった。cf. *The Statesman's Year-Book*, 1872, p. 385.

63) 久米邦武編『米欧回覧実記』岩波文庫, 1980, 第4巻, 34ページ。

64) 『森有礼全集』, 第2巻, 18ページ

65) 同書, 382ページ。

66) この本の英訳は1854年に出版された。Marquis de Custine, *Russia*, London. 1854.

若き森有礼のロシア観をめぐって

世になりて魯国は大に開けしとぞ。」⁶⁵⁾

このように森は、ロシアの専制政治がイギリスとはまったく違うこと、そして皇帝と人民の関係においてはむしろ日本や中国に似ているとして、それをロシアの後進性の証拠だと見ている。この箇所の叙述は先に兄あての手紙の末尾に見た「皆其国人帝を以て神とす。何ぞ愚且不義の甚しきや。」という言葉と全く軌を一にするものである。当時のイギリスの新聞雑誌がもっとも多く取りあげたのは、このロシアにおける民衆、とくに農民の皇帝に対する伝統的な忠誠心であり、多くの新聞論調はこれをもってロシアの後進性の表われであると解釈した⁶⁶⁾。「国の開けざること知るべし」という森の評価もこれと全く同じである。

しかしこの文章の後半で、森は1861年の農奴解放以後のロシアの一連の「大改革」に言及して、ロシアの政治が次第に「自由」に向かいつつあり、それが皇帝アレクサンドル2世の「仁徳」のたまものであるとしている。この評価も当時のイギリスの一般的な見方と同様と見てよいが⁶⁷⁾、これより7年後の岩倉使節団になると、もっときびしい見方をするようになり、農奴解放の実状を述べて、ロシアの農民は「猶殆ト奴隸ニヒトシク、自由ヲ得ルモノ絶テ少シ」(傍点原文)⁶⁸⁾と断じている。

イギリスのジャーナリズムがロシアの諸改革中、農奴解放と並んで特に注目したのは、1864年に施行された司法制度の改革であった。ほとんどの新聞や雑誌はこれを高く評価し、『ウェストミンスター・レビュー』などは、「この改革だけをとりても、アレクサンドル2世の治世は、賢明で、リベラルで、神を恐れる君主の統治と呼ぶにふさわしいであろう。」と手ばなしで賞讃した⁶⁹⁾。森の文に見られる「リバチー」に向かっているという評価も、このあたりから来たのであろう。

このあと森は、ロシアの「奇政」の具体例として、つぎのような体験を記している。彼らはクロンシュタットに入港した時、ここには火薬庫が多いので、港内では火器はもちろんのこと、煙草を一服することさえ「厳禁」とであると告げられた。したがって船の中で炊事が出来なかったため、一同は陸に上って、レストランで食事をせねばならなかった。ところが港内に碇泊中の蒸気船はみな黒々と煙をあげていたのみか、森らの船に乗って来たロシアの士官は、一同に煙草をすすめたというのである。ここで森は、もしかすると、火気を禁じたのは、陸の上のレストランを儲けさせるための措置ではなかったかと疑問を呈している。このエピソードを紹介した文の冒頭で彼は「『後世魯は世界の邪魔物歟』(今西洋の勢ひを察するに魯は古へ周世の奏ならん)けれどいまだ奇政の甚しき事多し。」⁷⁰⁾と記しているが、この引用符の中の言葉は、彼が読んだイギリスの本からとったものであろう。

この翌日森らはクロンシュタットからペテルブルグに入り、「ホテルデフランス」に投

65) 『森有礼全集』、第2巻、18ページ。

66) Thorn III., *op. cit.*, p. 89.

67) Cf. *ibid.*, p. 112.

68) 『米欧回覧実記』第4巻、29ページ。

69) Thorn III, *op. cit.*, p. 154.

70) 『森有礼全集』第2巻、18ページ。

宿するが、ここは岩倉使節団も泊った⁷¹⁾冬宮に近い一流のホテルである。ここで森と松村はイギリスの富商モルガンなる人物の出迎えを受けるが、彼にはその後も別荘に招かれたり、イギリス公使ブキャナンの別荘に案内してもらったり、いろいろ親切にもてなされている。森の記するところでは、ブキャナンにはオリアントからの紹介状があったが、モルガンはロンドンの船の「世話人ジェームソン」から森らのことを依頼されただけの商人であった。それなのにモルガンは日本からの二人の留学生を実によく面倒みており、この点で森らは幸運であった。さらにイギリスの公使が、下院議員の紹介状があったとはいえ、年少の日本からの学生二人を招いたというのも、特記してよいことであろう。この日の森の日記はつぎのようである。

「8月26日 英国のミニストル「ボカノン」の野亭へ（都より凡四里）世話人モルガンと同伴して行き、大に饗応に頂りたり。此ミニストには極寛祐の体に見えて親切の人物也。」⁷²⁾

これを露都でゴシケーヴィチからほうっておかれた幕府留学生の待遇とくらべるなら、両者の相違はあまりにも大きかったといわなければならないだろう。

森が山内作左衛門らを訪ねたのは、ペテルブルグに着いた日の夕方7時頃であった。この日の日記に森は他の留学生については姓名と年齢を記しただけで、あとはもっぱら山内のことを記している。

「山之内氏は以下（御目見以下のこと一引用者）なれども齢も長じ、学文^{々々}もあって、諸事両士（緒方と市川のこと一引用者）より遙に勝さらん。余は乳児也。案外に此人々等親切にして、諸事を周旋せり。且打明けて談話をなせり。国事を談ずるにいたっては可嘉喜矣。此人々等幸に関東魂を不持抱、頻に京師を護する之志操あれり。殊に山之内は国学をして、本居先生を信心して、勤王之説を主吐す。且また当人之説に、当時日本之如く銘々割拠しては終に世界従横の業成がたし。只君は一人にして、政法一途に出ざれば、国家終に不開、恐多くも他人の有と成べしと。」⁷³⁾

幕府と薩摩藩との対立は、単に日本国内にとどまらず、翌年春パリで開かれた万国博覧会でも国際的に表面化するところとなるが、森にしてみれば、はたして幕臣たちが自分たちを受け入れてくれるか否かについて、最初は心配がなかったわけではない。それが意外にも「親切に」もてなしてくれたばかりか、山内とは尊皇の志と、日本が内乱を早く克服して統一政権をつくらなくては、やがて列強の植民地となるかも知れないとの認識で一致した。このことは森にとって大きな喜びであったに違いない。このとき森と山内の少なくとも二人は、幕臣や薩摩藩士といった枠を越えて、共に日本人として祖国の危機を心配しているのである。森と山内とはよほど意気投合したらしく、二人の交わりは日本へ帰国後もつづき、さまざまな話題を投じたといわれる⁷⁴⁾。

71) 『米欧回覧実記』第4巻, 47ページ。

72) 『森有礼全集』第2巻, 28ページ。

73) 同書, 20ページ。

74) 内藤前掲書, 80-81ページ。

若き森有礼のロシア観をめぐって

森と松村は翌日も山内らに招かれ、「日本料理のそば切り」を馳走になったが⁷⁴⁾、露都を去る日には今度は山内らを招いて別れの宴をへった。この時山内と森はそれぞれ七言絶句を三首つくって交換しているが、「一日交如百歳親 得歎直到別情新」という山内の文と、「邂逅通歎窮北郷 客心自恨馬蹄忙」という森の言葉に両者の気持がにじみ出ている。

ところで幕生たちは、初めて会った日に森たちに向って、ロシアに留学したことを後悔している旨不平を漏らしている。それはこの土地の気候が、夏は暑さが凌ぎがたく、冬は寒気が堪え難い上に、ロシア語を習得することがきわめてむずかしいということであった。更にロシア語を習っても、ロシア以外では通じないという事実があった。彼らは森に対して、ロシアでは海軍はイギリスから、陸軍はフランスから、医学はドイツからという風に外国から学んでおり、この国に外国から留学するという例は聞いたことがないとも語った。緒方などは実際にロシア語の動詞の変化や形容詞の変化などの複雑さを示してくれた。森自身宿泊したホテルで、意外に英語が通じない反面、ドイツ語とフランス語とは「町人或は御者の徒に至るまでよく辨ず」ることを経験を通じて知った⁷⁵⁾。

この7年後アメリカ駐在の代理公使の地位にあった森は、将来の日本の教育についてアメリカの識者の意見を質したが、その中で彼は日本語は日本以外に通用しない *weak and uncertain medium of communication* なるが故に、将来必然的に英語に席をゆずることになるであろうと、きわめてラジカルな見解を述べた⁷⁶⁾。このような森であれば、幕生の不満を聞いたとき、ただちにこれを理解し、彼らのロシア語習得に対する疑問と不満とに深い同情を示したことと思われる。

森が幕府留学生と会った日の日記には、さらに先頃起こったロシア皇帝暗殺未遂事件について、以下のように記されている。おそらくこれは当日彼らの間で話題にのぼったのであろう。

「今春当帝の刺客に逢ひ、幸にして命を免れたる哉。人皆以神助とおもひ、之れが為に帝の難に逢ひたる場所に一寺を建てんと其設（設け当時）最中也。宗旨信心之深き事以て知るべし。帝の此難を免れたる哉、国人皆帝城に群り集り祝言を叫ぶ三昼夜断へざりしと。帝初め躬ら城窓より出て謝せし⁷⁷⁾といへども不去、城外に出て自謝に及んで又不去、遂に皇子を携へ出て衆に諭示し曰、皆静に開け、朕縦令今死すともここに皇子あり。以て朕が志と位とを続き守り、世の為衆の為心を尽すべし。必ず騒挑するなかれ。国人之を聞き一度に啞と萬歳を唱へ、過半は感涙を流して地に拝伏せしとぞ。それより終に立ち去りしとぞ。帝の人気を得たる察すべし。帝の刺客に逢ふゆへんは事永ければ今略す。」⁷⁷⁾

この年4月4日、ペテルブルグの「夏の公園」の入口で、皇帝アレクサンドル2世が何者かによって狙撃された。犯人はその場で捕えられ、カラゴゾフというサラトフ県の小貴族の息子で、カザン大学とモスクワ大学の元学生であることが判明した。彼は自分の従兄弟であるイシューチンを中心とする秘密結社「組織」と、その中のさらに少数の精鋭メ

74) 『森有礼全集』第2巻、28ページ。

75) 同書、23-24ページ。

76) 同書、第3巻、266ページ。 *Introduction to Education in Japan*, January 1st, 1873.

77) 『森有礼全集』第2巻、26ページ。

ンパーから成る「地獄」に加盟していた。カラコーゾフはこの年春、皇帝暗殺を企図して、モスクワからペテルブルグに出て来たのであったが、捕えられた時手書きの『友人たる労働者たちへ』と題する檄文が見つかった。そこには皇帝が殺害されたあと、社会主義体制を打立てるために革命を起こすようにとの呼び掛けが記されてあった。この時カラコーゾフが失敗したのは、たまたま近くに居合わせたコストロマーの農民出身のコミッサールロフなる商人が飛び出して、ピストルを持ったカラコーゾフの腕を打ったからであった。この事実はツァーリに対する農民の敬愛を示す実例として、事件のあと政府によって大々的に喧伝されるとともに、コミッサールロフは貴族に叙せられ、自由経済協会の名与会員にも推挙された⁷⁸⁾。なおこの時皇帝は、引き立てられたカラコーゾフに対して、まず第一に「お前はポーランド人か？」と訊いたという⁷⁹⁾。

森がこの事件について山内から聞いたと推定されるのは、山内が父親あての手紙の中で以下のように語っているからである。ここにはカラコーゾフの出自についてなど誤りもあるが、事件の背景に農奴解放後没落してゆく旧地主貴族の不満を見ている点など、興味ぶかいものがある。

「帝外の庭園に逍遙いたし候を窺い小銃にて打んとせしもの有之捕れん候。そは帝の庭園に在る方を伺ひ頻に手を懐に入、何かと伺ひ候様子を見留しもの有之、彼の歩行にしたがい跡をつけ参り、終に筒を出して打んとする所を腕を上へはね上げ候に付、ねらひちがひ打はつし終に捕はれ候と申事に候。其助け候もの即座に一万枚の賞賜を得、且士官に取立られ、加え陸軍惣体のものより金を出し家を作り呉候積と申事、仕合のものに候、其逆をはかり候ものは大名の件にて候よし。元来大名各々の領地之百姓召使ひ候事頗る思少く有之候所、当時の帝に相成民の領民たる事をゆるし耕作みな備入れてつかふ事に法を出し行ひ候所、民は恩に馴れ、更に働くもの無く、己の田地を耕し食ひ、更に備作するものなく、且金を募らされば働くもの無之様にいたり、豊富の家も次第に涸弊し、年分七八万の金を得候もの、わずか一二万ならでは収納無之、地有て耕人なく、困窮に及候に付、此義をうらみ帝を害し身をはたし候之積にねらひ候との事に候。余党も有之哉にて即今穿鑿中との事に候。此人を捕へ、後七日の間、御本貫(マ)を知らず糺方よろしからずとて奉行老人退役して後新奉行一日にて白状を為致しとぞ。其ものの親は曾て此事に与らざれば、父に罪の及ばざる様願候よし歎訴いたし候との事に候。此事、三日の五時に起りて八時に板にいたし新聞紙に出し候。これらの速なるは感心の事に候。」⁸⁰⁾

森がその『紀行』の中で、「帝の刺客に逢ふゆへんは事永ければ今略す」といっているのは、この山内の説明を考えてのことであろう。しかし山内はカラコーゾフ事件の原因として、農奴解放令による旧地主貴族の没落をあげているが、これは当たっていない。むしろ、これは、実際に施行された解放令があまりにも自分たちの期待から程遠いことに幻滅した、一部の急進的な若いインテリゲンツィアのテロリズムであって、山内も森もここまで理解が及ばなかったものと思われる。このカラコーゾフ事件は、その後のネチャーエフ

78) А. И. Герцен, *Собрание сочинений в тридцати томах*, Т. XIX, стр. 382-383.

79) Venturi, *Roots of Revolution*, N. Y., 1961. p. 347.

80) 内藤, 前掲書, 209-210 ページ。

若き森有礼のロシア観をめぐって

ヤトカチーフの革命組織や革命理論に受け継がれ、さらに1881年3月1日のアレクサンドル2世の暗殺へとつながる、人民主義のテロリズムをめざす一派の最初の行動であった。しかし当時のイギリスの新聞・雑誌もこの事件を重大視することなく、『ウェストミンスター・レビュー』は、これをもって「一人の愚か者の仕業」と断じ、その唯一の効果は、民衆から見て皇帝の威光を増すことになるだけであろうと述べた⁸¹⁾。しかし中にはこの事件が、ポーランドの反乱とともに、ロシアの世論を自由主義からより反動的な方向へ逸らせることになるかも知れないと気づかう論調もあった⁸²⁾。事実ロシア政府はこの事件をきっかけとして、それまですすめてきた改革にブレーキをかけたり、反動的な政策をとるようになるのである。

つぎにロシアの対外政策について森の記すところを見てみよう。同じ8月24日の日記に彼は以下のように記している。

「此国之人性は元来実儀にして、西洋に而は田舎風なり。隅端にあるゆへ歟、一体英人を悪む事頻也。英人もおなじく魯人を悪めども却而嘲笑之体也。

魯は斯る大国を帯ながら猶四方を呑んと欲し、終に満州等は併せし由、且亦すでにアジアの北方に魯国より黒竜江まで通路をこしらへ、当時二カ月を歴て魯都より黒竜江まで達すとなり。今また其半途は汽車道をかけんと欲す。然れば数旬を不過魯都よりわが蝦夷地まで達すべし。恐るべし。魯人の世界に一帝たらんと之志心是皆世人の知る処にして、不記して顯然たり。」⁸³⁾

ここで森は、ロシアの極東進出について述べているが、ここには先の兄あて書簡の中には出てこなかった満州とか、黒竜江という地名が出てくる。この日彼は市川文吉に案内されて、ウラジーミル・ヤマートフという名前でロシア外務省アジア局に勤務していた橋耕斉に会っているが、このロシアの満州進出などは、耕斉から聞いたものと推測される。同日の日記にはこの辺りのことが以下のように記されている。

「帰掛り市川の引誘にまかせ橋耕斉の亭を問ふ。此人は本来遠州掛川之藩に而、太田撰津守の重役と聞へたり。撰津守大阪御城代缺京師諸司代及び幕老杯を勤めし頃、此人随従し執権職を勤めたりしとかや。此時（自身の喩）一人の善士を有罪人と見居て仕置に行ひて大に人望を失ひ、夫より転じて僧と成り、三カ年にして一寺を得、其時女の事ありて又還俗して卜筮医術ばくちうち杯を以て四方を遍歴し、多年を費し、十年ばかり已前に魯国の軍艦壹艘遠州洋にて颯に逢ひ、其節其艦に信を求め通して艦に乗込み、黒竜口に行き、暫時滞りしとぞ。其時セバステポル戦争半に□、右艦英の艦より被見付卒に英の擒と成り、英国にある事一年半計りにて、戦済之上皆魯国へ送り返され、其後遂に魯の臣と成り、今アジア州の司官に属して本積家之類也。

以上皆自身の話也。間々信難しき所も多し。

此人遂に実名を顕さず。又魯国におひてはボシミル大和夫と名乗れり。

今日本の地理其外国情等を国中に廣ろむ。魯国之情実も大方知れり。聞には甚だ幸也。

81) 同誌1867年10月, vol. 88, p. 243. Cf. Thorn III, *op. cit.*, p. 161.

82) *ibid.*, p. 162.

83) 『森有礼全集』第2巻, 24ページ。

齡は四十六也といへり。至而丁寧なる人物也。」⁸⁴⁾

橋耕斎は本名を立花久米蔵といい、文政三年（1820）遠州掛川藩に生まれたというが、安政二年（1855）ロシアの将兵267名と共に伊豆の下田より米船グレタ号でひそかに日本を去るまでのその経歴は判然としない⁸⁵⁾。山内作佐衛門はペテルブルグに着いてはじめてゴシケーヴィチから橋耕斎のことを紹介されたが、彼が日誌や父あて手紙に記しているところも、いま見た森の記述とほとんど変るところがない。ロシアの将兵と耕斎らは沿海州をめざしたものの、北樺太の沖でイギリスの軍艦に拿捕され、箱館、長崎、香港を経てロンドンへ連行され、そこで九カ月ほど抑留生活を送ったのち、ロシアに帰り着いた。したがって、森がここに記しているように「黒竜口に行き、暫時滞りしとぞ」というのは事実と反する。ゴシケーヴィチと耕斎は1857年にペテルブルグから『和魯通言比考』を出版したが、これはこのロンドン抑留中のつれづれなる中で執筆されたものである。1856年にペテルブルグに到着した耕斎は、ただちに外務省のアジア局に登録され、1857年には九等官として勤務につき、1871年には八等官に昇進している⁸⁶⁾。さらに彼は1857年の1月に洗礼を受け正教の信者となり、ウラジーミル・ヨシフォヴィチという名が付けられた。ウラジーミルは洗礼名であり、父称のヨシフォヴィチは、ゴシケーヴィチの名であるヨシフからもらったものであった。そして姓もロシア風にヤマトフと変えたが、これは日本の古い名称の大和に由来するものであった⁸⁷⁾。

彼は山内ら幕府留学生の世話をなにくれとよく見て、そのため彼らがロシアを理解する上で大きな助けになったが⁸⁸⁾、森や松村に対しても冬宮やペテルホーフを案内したり、外務省へ連れて行ってくれたりした⁸⁹⁾。

ロシアの極東進出について森は、この国が黒竜江地方を手に入れた結果、首都からこの方面への旅程がはるかに短縮されるようになったことと、計画中の鉄道が完成したならば、この旅程はさらに縮まり、数旬を経ずしてペテルブルグから樺太・北海道まで到達するようになるだろうと述べている。

ロシアがアムール川の渡航権を得る以前には、首都から太平洋岸にまで出るためには、イルクーツクよりレナ川に沿ってヤクーツクへ出、ここから徒歩もしくは騎馬でスタノボイ山脈を越えてオホーツクへ出るしかなかった。イルクーツクとヤクーツクの間(約2,700軒)は、夏季は舟を利用して比較的楽であったが、冬季にはレナ川沿いの急峻な山道をたどらなければならず、事故がたえなかった。とりわけ難渋したのはヤクーツクからオホーツクへ至る峻峻な山道(約1,100軒)で、ここは馬車を使うことが出来ないため、重い荷物はいくつかに分けて馬の背に乗せて運んだ。森の露都訪問より62年前に、露米会社に雇われたロシア海軍の二人の士官、フヴォストフとダヴィドフは、ペテルブルグより駅馬車を用いて59日かけてイルクーツクへ達し、そこから20日かかってレナ川を下ってヤクーツク

84) 同書、20-21 ページ。

85) 中村喜和、「橋耕斎伝」、『一橋論叢』63巻-4号、514-540 ページ。

86) 内藤、前掲書、69-77、221、253、270 ページ。

87) 中村、前掲論文、526-527 ページ。

88) 内藤、前掲書、221 ページ。

89) 『森有礼全集』第2巻、29-31 ページ。

若き森有礼のロシア観をめぐって

ツクへ出、さらに31日かけてオホーツクへ達した。首都からは117日、イルクーツクからでも51日かかっている⁹⁰⁾。これは夏でレナ川を舟で下る比較的楽な旅であったが、この9年後の1811年の初冬、海軍少佐リコルドはオホーツクより騎馬でイルクーツクへ向かい、馬に乗り通して56日かかっている⁹¹⁾。それが森のロシア訪問の12年後の1878年(明治11年)榎本武揚の場合、ペテルブルグからモスクワを経てニージニ・ノヴゴロド(現ゴーリキー)まで汽車を用い、ここから船でヴォルガ、カマ川を下ってペルミへ達し、33日でイルクーツクに着いている。(ロシアでは鉄道が出来る前は冬の橇の旅がもっとも早く、1791年(寛政3年)2月、大黒屋光太夫はキリール・ラクスマンに伴われて、わずか30日余りでイルクーツクから首都のペラルブルグに着いたが、この時は昼夜別なく乗り通して、橇のあまりの早さに光太夫は最初の頃は耐え難く感じたという。)⁹²⁾榎本はイルクーツクからキャフタ、チタ、ネルチンスクとシルカ川沿いに黒竜江へ出、川を下ってイルクーツクから24日かかってハバロフスクへ達し、そこからウスリー川を下って8日目にウラジヴォストークに出た。彼はシベリアの随所で見物に時間を費やしたが、それでも首都から太平洋岸まで一万キロの旅を65日で踏破したのであった⁹³⁾。

ロシアの鉄道建設は1837年に初めてペテルブルグとツァールスコエ・セロー(現プーシキン)の間25露里が開通して以来、1851年にはペテルブルグ―モスクワ間が建設された。(この間については、皇帝ニコライ一世が地図の上に定規を引いて路線を示し、インキのこぼれたところは、その通りに線路が迂回したというエピソードがある。)1857年には勅令によって「ロシア鉄道総社」が創設され、イギリス、フランス、オランダなどの銀行の借款を得て、1861-1866年間には2,600露里、1866-1870年間には6,400露里が建設された⁹⁴⁾。したがって森がロシアを訪れたのは、まさに第一次鉄道建設ブームの最中であった。この後ロシアはウィットの下で1890年代に第二のブームを迎え、1891年にはシベリア横断鉄道の建設が開始されるが、森が耳にしたのは「其半途」を建設しようとの計画であった。ここで彼が「恐るべし」と記しているのは実感がある。

この文章のあとで森は、ロシアとの戦争の教訓についてつぎのように記しているが、これは炯眼というべきであろう。

「此国兵卒の夥敷こと驚目に堪たり。外国人の魯を諱み懼る処只是のみ。縦令露と戦を始めて幾度勝ても破ても糧は多し兵は多し。遂に外国人空し財を費し兵を亡失し、半途にしてやめて和を結ぶに至る。カライミヤの戦則是也。」⁹⁵⁾

すでにわれわれは森が兄あての手紙の中で、ナポレオンの大軍の敗因が、ロシアの広大さと寒気とにあると記しているのを見た。いまここで彼は兵力の「夥しい」ことを指摘しているが、これらの事実は、19世紀のロシアについて妥当するだけでなく、20世紀にも

90) 拙稿「ニコライ・フヴォストフ略伝」、『あうい』No. 10 (1982) 7-10 ページ。

91) 「艦長リコルドの手記」,ゴロヴニン著『日本幽囚記』下巻,(岩波文庫),215 ページ。

92) 『北樺聞略』1965, 38 ページ。

93) 加茂儀一『榎本武揚』1960, 243-244 ページ。作家アントン・チェホフは1890年の春から夏にかけて、モスクワからサハリンまで旅したが、モスクワからイルクーツクまでに46日、イルクーツクからニコラコフスクまでに30日かかっている。『チェーホフ全集』第13巻,1969,466 ページ。

94) Florinsky, *op. cit.*, vol. 2, p. 789, 934, 1104.

95) 『森有礼全集』第2巻,24 ページ。

あてはまるところである。この日記の中には、先の書簡に見られたロシアの「不強」なることを指摘した言葉は見当らない。むしろロシアと戦うならば、緒戦の勝利は得られても、最終的な勝味のないこと主張しているのである。

日本人のロシアに対する見方には、先に触れた「ロシア聳肩」をのぞけば、「ロシア脅威」論が主流を占め、それと表裏一体をなす形で先の森の書簡に見えた「ロシア不強論」あるいは「ロシア何するものぞ」という考えが⁹⁶⁾、伝統的に存在した。いまここに見られる森の「ロシア不敗論」とでもいうべき見方は、その中間にあるもので、これも明治以後かなり有力に存在しつづける見解であり、ロシアの現実を知る日本人の間にはよく見られたところであった⁹⁷⁾。

このあと森はロシアの軍事費を1864年の例にとり、総額(3億15万7,500ポンド)、及び陸海軍別に記し(陸軍2億70万、海軍48万7,500ポンド)、ロシアの海軍はヨーロッパ第三なることを述べている。しかしこれはポンドで表記されているところから見て、イギリスの資料にもとづくものであったことは疑いない。(しかも多分一桁多く誤記している。)ロシア政府にとって軍事支出は全予算のかなりの部分を占め、1860年において軍事予算(1億2,900万ルーブル)は全国家予算の36%を占めていた⁹⁸⁾。

岩倉使節団もロシアの軍事には関心を抱き、造船場や製鉄工場を見学するとともに、ロシアが近年海軍に力を入れている旨記している⁹⁹⁾。しかし山内作佐衛門ら幕府留学生は、その書き残したもののなかで、軍事についてはまったくといってよいほど触れていない。

8月28日には森は松村と二人で一日をさいて「米国の鉄軍艦」トリッドシップを見物に行った。これは当時世界最強といわれた軍艦で、この日の日記に「活城とは實に是也」¹⁰⁰⁾と記している。

先に引用したロシアの対外政策に関する森の文章の冒頭に、ロシア人についての印象が「実儀にして……田舎風なり」と出てくるが、この点は森に同行した松村淳蔵も同じ印象を得たらしく、その「洋行談」のなかでつぎのように語っている。

「人民は割合に淡泊にて誠に交り易く朴实の風あり。兵隊杯は英兵に比すれば田舎風に見劣せり。」¹⁰¹⁾

森と松村は、イギリス公使ブキャナンに招かれた翌日、ゴシケーヴィチの自宅に招かれた。この日の日記に森はつぎのように書いている。

96) これより7年後に露都を訪れた岩倉使節団は、当時ヨーロッパの強国としてイギリス、フランス、ロシア、ドイツ、オーストリアの五国をあげ、この中「最も雄観なるを英仏」「最も不開なるを露国」とした上で、多くの内憂外患を抱え、先頃アラスカを米国に売却したロシアを必要以上に日本が恐れることはないといっている。『米欧回覧実記』(四)106-110ページ。

97) たとえば、日露戦争後の二葉亭四迷のロシア観がそれである。二葉亭四迷「送別会席上の答辞」、『二葉亭四迷全集』岩波版、第5巻、1965、275-277ページ参照。

98) Flrinsky, *op. cit.*, vol 2, p. 943. なお帝政ロシアにおける教育予算は、全国家予算中もっとも多い年(1915年)で4.9%、もっとも少ない年(1855年)で0.6%で、通常2%を上下していた。Cf. Johnson, W. H. E. *Russia's Educational Heritage*, Pittsburg, 1950, pp. 291-292.

99) 『米欧回覧実記』(四)、89-90ページ。

100) 『森有礼全集』第2巻、29ページ。

101) 同書、382ページ。

若き森有礼のロシア観をめぐって

「8月27日

ゴスケウイチより被召てまた大饗応にあへり。此人は此前、日本箱立へ魯国之カンスルにて来り居、滞溜する事七年余り、そして日本語を通ずる事甚妙也。其前支那学満州学等を学でんおもしろき人也。日本書漢書満州書等を沢山蔵めたり。就中日本書は夥し。其子も同じく父に従って日本に永くあって、和語を話すこと父より勝れり。若年故歟。われ彼等に尋ねて曰、和語は如何、余おもふに定めて外国の人には六ヶ敷あらん。故は全く文典も字書もなく甚次第不同也。彼等一同に口を揃へて曰、左にあらず。只和語ばかりならば至而学ぶに容易く且奇麗なる国語也。併ら当時漢語を混じ合て甚だ不宜。殊に近頃其弊日に増して漢語の方殆ど過半なり。可歎矣々々といへり。此人当時幕生衆の師匠也。」¹⁰²⁾

これを見ると、ゴシケーヴィチは森らを大いにもてなし、その厩大な蔵書を示して、日本語についての親子の見解を語ったことがわかる。森は彼らのこの日本語に対する考えをよほど面白く感じて、わざわざ日記に記したのであろう。さきに幕府留學生がロシア語について語ったところにも森は興味を示しているが、彼の言語問題に対する関心をこのエピソードはよく示すものといえよう。

しかしこの日ゴシケーヴィチは意図的にか外交問題には触れなかったようである。この問題について森が多少なりとも述べている件は、8月31日に外務省のアジア局に局長ストレモウーホフを訪問した折の次の記述である。

「魯国に而諸事諸物概官府に属せざるはなし。和漢に略おなじ。ミニストル都合12人、各一方々々の職を司務してやる。外国奉行のゴフ（ゴルチャコフのこと…引用者）という人にして当時西洋に而高名なる人物也。外国司務所も五ヶ所あり。各五大州の一州丈司配す。外国奉行は其五ヶ所の上司也。今アジアの役所にはピートル・ストレムクホン（ピョートル・ストレモウーホフのこと…引用者）といふ人其役所之頭役也。耕斉の案内によって同人と逢ふことを得、よく信を通してわれらの情も委しく陳して後日の結びを為せり。同人甚だ親切丁寧の人物にて、直様懇ろに話し、写真等交易せり。

壮年之人は如何程勝れ利巧の人といへども、頭取には政府より不免の由妙々々。」¹⁰³⁾

ロシアの官庁はアレクサンドル1世時代に省庁制（ミニステルストヴォ）がしかれ、森が露都を訪問した当時に存在したのは、内務（時の大臣ヴァルーエフ）、外務（ゴルチャコフ）、陸軍（ミリューチン）、海軍（クラッベ）、大蔵（レイチェルン）、司法（ザミャーチン）、文部（ドミトリー・トルストイ）、運輸（メーリニコフ）、宮内（アドレルベルグ）、逓信（イヴァン・トルストイ）、農務（ゼリョーノイ）、会計検査院（タターリノフ）の各省庁であった。

このうち外相は1856年からゴルチャコフが勤め、彼はその後1882年に退くまで26年の長きにわたってこのポストを占めつづけた。アジア局長のストレモウーホフは1823年生まれであるからこの時43歳の「壮年」で、一方ゴルチャコフはすでに68歳に達していた。おそらくこの辺りの話が案内役の耕斉から森の耳に入ったのであろう。なおこのストレモウーホフはイグナチエフ伯の後任として1864年にアジア局長に就任していたが、森

102) 同書、28ページ（この時ゴシケーヴィチは52歳であった）

103) 同書、31ページ。

と会見した翌年には幕府の派遣した箱館奉行小出大和守と「樺太島仮規則」に調印することになる¹⁰⁴⁾。三等文官のアジア局の局長が、一介の留学生に対して「懇ろに話し」、写真まで交換したという背景には、もしかすると森たちが幕府に対立する薩摩藩のイギリス留学生だったということへの考慮が働いていたのかも知れない。いずれにしても、森らはその思うところを臆することなく詳述したことがこの一文からわかる。

この日の午後、森たちはモルガンの別荘に招かれているが、モルガンは同時にプーチャーチン提督夫妻も招いて、両者を紹介した。プーチャーチンは日露通好条約を締結した功績で伯爵に叙せられ、さらに1861年の6月には文相に任ぜられた。しかし文相としての彼は、新しい大学規則を定めてきびしい文教政策をとったために大規模な大学紛争を惹起し、12月には辞任のやむなきに至った¹⁰⁵⁾。森と会った当時のプーチャーチンが、この文相としての体験を語ったか否かは不明であるが、この頃は比較的暇な生活を送っていた時期である。このプーチャーチン中将との会見の様子を森はつぎのように記している。

「昼過より世話人モルガンの野亭に招かれ、同車よりして行けり。其亭は夏ばかり暑気凌にこしらへたる亭とぞ。甚だ立派の亭也。饗応等にあへり。魯国のアドミラル（プチャーチン）一人家内を携へて来て居れり。此人八九年前に日本にあって將軍にも謁せし由。且留淹する年あって日本の形勢風習等よく知り貫けり。不開の日本の風習話には大に畏れり。此人則遠州洋に而颯に逢たるアドミラル也。当時は船は離れて海軍所出役の衆中也。」¹⁰⁶⁾

このあたりの記述を読むと、モスクワ郊外の別荘の庭での会話のやりとりが目に浮かぶような気がする。勿論この時の森は、20年後に自分が日本で最初の文部大臣に就任する運命になるとは、夢にも思わなかったに違いない。プーチャーチンの夫人はイギリス人であったから、この時の会話は通訳を介することなく、夫人やモルガンも交えて英語で自由に行われたことであろう。プーチャーチンが語った日本の奇妙な風習というのがどのようなものだったかは、彼に秘書役として随行したゴンチャロフの『日本渡航記』に明らかである¹⁰⁷⁾

森も松村も冬宮が壮大で、豪華なことに目を眩したが、とくに正教寺院の華麗さには驚いたらしい。ロシアの国教であるギリシャ正教について、森はつぎのように書いている。

「此国には種々の宗教あり。内としてグリーキ（ローマンカソリックと大同小異）といふ宗旨甚だ発拡せり。帝族はじめ皆是の宗旨なり。帝城の内に中央に一寺ありて、毎朝帝族の看経所とぞ。外にも極大家之殿中には如斯看経所ある場所もあり稀なり。

軍屋中にも一寺つつありとなり、毎日罪人をして経を読しめ懺悔をなさしむとぞ。此方便可嘉矣々々。

104) Stephan, J., *Sakhalin; A History*, Oxford Univ. Press., 1971, p. 59. このあと1875年に榎本武揚と「樺太千島交換条約」の交渉を行ったのもストレモウーホフである。

105) なおこの時後任として文相に就任したのは、松前で幽閉されたワシーリー・ゴロヴニン少佐の息子のアレクサンドル・ゴロヴニンであった。

106) 『森有礼全集』第2巻、31ページ。（括弧内は原文）

107) 井上満訳、岩波文庫（1941）、51-53、73-74、112、288-294、302-303ページ等参照。

若き森有礼のロシア観をめぐって

此国之寺院の廣大にして且美麗なる事實に驚然、歐羅巴におひて第一とす。就中イサクカセデル（イサーキエフスキー寺院のこと一引用者）という寺は都の中央にあって大伽藍なり。三帝を経て建造成就せしとぞ。其入費察すべし（中略）

国民の宗旨を信ずるは国々の習ひなれど、魯国杯は最も甚し。また寺数の多きこと満目挙て数へ難し。凡人共其寺前を過る時は、必ず冠を取り敬しく礼拝をなし、或は腰を屈め頭を地に垂して拜むもあり。或は立ながら拜するものあり。如此人は皆凡人にして、僧より誑誘されたる者共也。凡上の人途中辺にて如斯することを嘗て見聞せず。（後略）」¹⁰⁸⁾

森のこの描写は、正教についての岩倉使節団の見方と相通ずるものがある。即ち後者は「此教（ギリシャ正教のこと一引用者）ハ、西教ヨリ更ニ陋ニシテ、人民ニ迷ヒ多ク、智巧ノ進歩ニ妨ケテ受ルコト少カラス」¹⁰⁹⁾と記している。森も岩倉使節団も、ギリシャ正教をもってローマ・カトリックやプロテスタントよりも劣ったもので、これを信ずるロシア人が未開であると見ているのである。

森は文化や宗教にはそれほど関心がなかったとみえて、以上に引用した以外に殆ど記していないが、ロシアの悪しき風習として二つをあげている。その一つは遺産争いであるが、これについては「事ながければ今は略す」として具体的な例をあげていない。多分、森は山内あたりからこの遺産争いの話を聞いたものであろう。だが山内がその『魯西亜事情』¹¹⁰⁾の中で、具体例を二、三述べているので、われわれは森がここで省略した話の内容を推察することができる。森のいうもう一つの悪しき風習とは、結婚した男女の不義（森の用語では不別）・密通と未婚の女性の出産である。

「密かに他人と通じて子を生し、又ははまだ嫁せずして子を産するものあり。如斯人甚だ夥しく、其上甚だしきに至りては其生子を養育する事能はず、途に棄もあり、或は秘密に殺すもあることなり。有志之人頻に防禦之策を考慮して遂に方便なしと。然る処皇后此事を聞き甚だ歎息し、卒に一つの方をめぐらし、國中に令して博奕かるたを造り又外国より求め乞ふ事を厳禁とす。ソシテ躬から其かるたをこしらへ、四方に売払ふて其利足を得て以て棄児院を立て、右之如くして生したる子供を養ひ、其密通人の名を不認、誰れの子たりとも育ひ立て、世間之事共教へ知らしめて後其院より出し、人の僕役等に用立せ、一人も生活を猥に破らん様に為されしよし、然る処人却而放妄におもむき、其後棄子を生ずる事大に倍せりとぞ。

われ嘗て聞けり。此弊のある事、恐多くもわが国といへども皆同じ。ソシテ人々昔より是には大畏なりとぞ。若し魯国の如くなせば、活物を棄殺するの弊は無しといへども、人の大倫を乱る事また如何とも為し難し。雖然之をよく処置せずんばあるべからず。われ之をおもふて憂患夜寝を廢す。古より欲と色とは人の去り難ものにして、禪真等の僧の如き名は色欲を絶といへども、一人も終身之を守り能ふものを不聞。況や凡夫凡婦をや、皆是無学無心之もの共也。深く咎め罪すべからざる理りもなきにしてもあらず。雖然夫婦を別にするは人の大倫ゆるがせにすべからず。嗚呼予已に齡廿に至って、いまだ其良慮を持す

108) 『森有礼全集』第2巻、25-26 ページ。（括弧内は原文）

109) 『米欧回覽実記』(四)、37 ページ。

110) 内藤、前掲書、271-287 ページ。

る能はず憾々々。」¹¹¹⁾

ロシアの孤児院(森の用語に従えば棄子院)については、すでに森より62年前にペテルブルグを訪れた石巻の漂流民津太夫らも興味を抱いて、これについて語っているが¹¹²⁾、岩倉使節団もとくに関心を寄せて、具体的な数字をあげて、この制度を詳述している。それによれば当時一年に棄てられる子供の数は約七千で、二万五千余人が中央・地方の孤児院で養育されていたという¹¹³⁾。

しかしこの一文で、それまで冷静で客観的に記してきた森は、珍らしく自分の感情をむき出しにして「憂患夜寝を廃す」とまで言っている。孤児院を作らなければ、棄てられた子供は死ぬほかない。とって孤児院を作れば、今度は男女関係が乱れ、不義の子を生む者が多くなる。このジレンマをどう解決したらよいのか。それを思うと夜もおちおち眠ることができないと、この幕末の若いエリートは悩むのである。

その後明治7年(1874年)から翌年にかけて、森は『明六雑誌』の第八号以下に「妻妾論」を連載したが、そこにおいて彼は「夫妻の交は人倫の大本なり。其本立て而して道行はる。道行はれて而して国始て堅立す」「今我邦婚交の習俗を視るに、夫恣に妻を役使して其意に充たざるが如き、任意に之を去るも国法嘗て之を律さず。是を以て権利義務其間に行はるを得ず。名は夫婦たりと雖ども其实を距ることを甚だ遠し。故に余敢て謂ふ、我邦人倫の大本未だ立ずと。」¹¹⁴⁾と記した。そしてその末尾に、外国の婚姻法を参照して作ったという、日本の将来の婚姻法案を掲げて、議論の素材として提出した。しかもその翌年二月、彼はよく知られているように、時の東京府知事大久保一翁の面前において、福沢諭吉を証人として、広瀬阿常と「婚姻契約(ママ)」¹¹⁵⁾をとりかわした上で結婚したのであった。

このような事実を考えあわすと、上の森の「嗚呼予已に齡廿に至って、いまだ其良慮を持する能はず。憾々」という言葉は、決して一時の誇張された表現ではなく、彼の心底からの真摯な告白であったと見なさざるを得ない。森の伝記研究者の多くが、この19歳の日の日記と後年の『妻妾論』とを結びつけて考えているが¹¹⁶⁾、彼は露都で抱いた疑問をその後も安易に解決したり、捨ててしまったりすることなく、ながく持ちつづけたのであった。さらにいうならば、この時森がロシアで抱いた印象や考えは、ひとり上述の男女間の問題に限らず、ひろく政治や社会全般についての後年の森の見解にも反映するところとなったことであろう。

9月2日、森と松村は露都で世話になった幕府留学生やゴシケーヴィチ親子(父親は病気のため来られなかったが)を招いて別れの宴を張り、翌日クロンシュタットよりイギリ

111) 『森有礼全集』第2巻、26-27ページ。

112) 『環海異聞』、卷之十一、(1976)、149ページ。なお大黒屋光太夫もこの孤児院のことを語っている。『北様聞略』、195ページ。

113) 『米欧回覧実記』、(四)、92ページ。

114) 『森有礼全集』第1巻、241ページ。

115) 同書第2巻、771-772ページ。

116) 木村匡、前掲書、74-75ページ。大久保利謙、前掲書、24ページ。坂元盛秋、『森有礼の思想』、1969、82ページ。

若き森有礼のロシア観をめぐって

スへ向け帰航の途についた。橋耕齋はクロンシュタットまで見送りに来て、何くれとなく世話をしてくれたという。9月10日、イギリスの港ハルに到着したとき、森はあたかも自分の国へ帰った心地がしたと記している¹¹⁷⁾。

(4)

ロシアからイギリスへ帰る船の中で、森は兄にあてて、またしても手紙を書いた。この中で森がどのようにロシアの印象を語ったかは、手紙の前半と後半が伝わっていないので不明であるが、そこにはわれわれのテーマに則して、無視できない一つの記述がある。それは森が兄の手紙を読んだ上で、今後兄が専門に勉強する課目として、法学を強くすすめている箇所である。

「1. 諸技学は捨てて国礎（則ち法の学にて今日本にて大目付の職）の学は如何。

其故は御存じの通り、法は国の大本、法不明にしては治国安民の事決して出来難し。たまたま我国伝来叶ひし法は立居候得多くは苛酷の法にして人情に遠し。無きに勝るの法なきにしもあらず。外国の法と雖又同じ。併私爰に着せしより以来已に一曆に盈ち、其間耳目に触る所の英の法に於て曾て不理の法なく、我国の法と比較を為せば、反て我法は不理且人情に遠き法のみにして、実に慚愧に堪へ不申候。斯る弊法を持して争て国家の改良を得ん。故に今若し兄之に応じ、今より萬国の法制を御学得あり、我国伝来の古法と折衷なされ、新に公平にして不拔の大制度を御築立有之候得ば、天下萬世に至ても誰か其澤を蒙らざらん。」¹¹⁸⁾

すでに述べたように、森たち薩藩留学生のみならず幕府がロシアに派遣した留学生も、すべて技術の習得を目的とするものであった。しかし森はこの手紙の中で、そのような枝葉の学問は捨てて、もっと国の礎である法学の勉強をなすべきであるといい、それを兄にすすめているのである。しかもその際に、彼は勉強の順序として、第一に英語を学ぶこと。第二は日本の法制度を勉強し、知悉すること。第三として、西洋風の算術も身につけることの三つを「最要用」¹¹⁹⁾として記している。

森がここで述べている枝葉の学としての技術よりも、国の礎の学としての法学の重要性の認識は、この度のロシア旅行の成果というより、それ以前の一年間のイギリス留学をも含めた、彼のヨーロッパでの生活と勉強の結論と考える方が正しいであろう。ここで大切なのは、森がヨーロッパ文明を目のあたりに見て、壮大な建物や華麗な寺院や堂々たる軍艦を産み出したヨーロッパ社会の根底にあるものとして、日本とは全く異なる法体系の存在に着目したという事実である。ロシアへ行く直前に、ニューカッスルに数日滞在した時、森は一日この地の「盲院」と「聾啞院」を訪れ、その行き届いた教育ぶりに接して、「嗚呼宜哉西洋の開盛なる事、斯る聾啞盲等の人をも遂に不捨、よく人間の事を教へ辨へ、生活を安く保たしむるは可謂盛矣。余之事は随而知るべし。初めわれ此等の件を日本におひて聞しかど、嘗て信ぜざりき。今現然之を觀て感驚殆ど記し難し。」¹²⁰⁾と記したこ

117) 『森有礼全集』第2巻、33ページ。

118) 同書、55ページ。(括弧内は原文)

119) 同書、56ページ。

120) 同書、10ページ。

とがあった。まだ若い日本の旅行者が、異国の地方都市に来て盲学校と聾啞学校を訪問するのも尋常ではないが、このような教育制度の存在を通して「西洋の開」すなわち、ヨーロッパ文明の生きた姿を見て感銘を受けた事実も特記されてよいであろう。

森よりも四十年余前に、ロシアからイギリスを訪れた若きロシアの知識人たるチャアダーエフは、ロンドンでは何よりもその美しく手入れされた公園に目を瞠ったという¹²¹⁾。ここでも彼を驚かせたのは、人びとの生活の中に根づいているヨーロッパ文明の生きた姿であった。若い日の森がイギリスやロシアで見て感じたものは、まさに十九世紀初頭のロシアの若いインテリゲンツィアが西ヨーロッパ社会に接して感じたところと軌を一にするものであった。しかしこのような疑問をチャアダーエフのように思想の次元で問題にし、そこに日本の文明とヨーロッパの文明との本質的差違を問うようになるのは、森よりも次の世代に属する¹²²⁾。

森のロシア観は屢々そのイギリス観と対比され、彼が四十日に及ぶ訪露の旅を終ってハルに帰り着いたとき、あたかも自分の国に帰った心地がしたということをもって、森にとってイギリスが第二の故郷となり、彼がすっかりイギリス最良になったと見なすことがある。たしかに二十歳前の森に対して、一年間のイギリス留学が決定的な影響を与えたことは間違いないが、しかし彼がこの時以後、親英反露主義者になったということでは決してない。それを示すものとして、ロシアから帰った翌年、森が他の四名の留学生とともに連名で大久保利通等に宛てた書簡がある。これは薩摩藩がフランスの政商モンブランと結んだことに対する警告の手紙であるが、その中で彼らはナポレオン三世のフランスに非難を浴びせるとともに、イギリスや全欧米諸国についても、次のようにその実体を描いているのである。

「私共当国へ到着仕候砌は、朦々たる耳目の為に奪れ、萬端歎息にのみ相傾き居申候処、日を経るままに恐避すべきの節漸相頭、当時に至り一の善友を求得、歐羅巴州は勿論、米地の風情も委細承り、唯取るべきの小なると避忌すべきの大なるとを理解せし次第に御坐候。英の政府之形勢も外面は成程公平なる哉に蒙眉には相見得候へ共、反て左にあらず、皆技巧権暴のみと此英人の説話を承り、実に其通之事御坐候。己を利せんには全く道を打忘れ、諸州諸島を奪掠し、友強拒弱は欧州米州之質也。」¹²³⁾

ここに出てくる英国人がローレンス・オリファントを指すことは、文中の他の箇所から明らかである。彼は下院議員としてはなばなく活躍し、世間の注目をひいていた最中に、突如議員を辞職し、一切をすてて米国へ渡り、ハリスの宗教結社に入ったのである。このような行動をとったオリファントが、自分の外交官として、またジャーナリストとしての経験から、19世紀後半の欧米列強の植民地獲得をめざしての進出を、森たちに諄々と

121) 拙稿「ロシアとヨーロッパ—チャアダーエフの歴史学哲学をめぐって—」, 柴田, 成瀬編『近代史における政治と思想』, 1977, p. 259.

122) われわれはこのような例として夏目漱石の『現代日本の開化』をあげることが出来る。なおチャアダーエフと漱石との興味ある比較的研究としては山本新『『欧化』の総体的反省—チャアダーエフと漱石』『神奈川大学人文学研究所報』第8巻(1974), 66-83ページ, などがある。

123) 『森有礼全集』第2巻, 823ページ。『薩藩海軍史』中巻, 980ページ。

若き森有礼のロシア観をめぐって

説いたことがこの文の背景にはあった。

森をはじめ、松村、吉田、鮫島、島山のこの建白書に名を連ねている五人の薩藩留学生が、オリファントに率いられて、リヴァプールから乗船して米国に向かったのは、この文書を書いた17日後の1867年7月27日のことであった。すでにこのとき森は、イギリスについてもアメリカについても、その政治のすべてを理想化することなく、国際政治のきびしさを多少なりとも身をもって学んでいたのであった。森のロシア訪問は、きわめて限られた期間ではあったが、この幕末維新期の若きエリートに、じつに多くの事を教えたといわなければならない。

(後記) 樺太千島交換条約が結ばれたのは、森が清国に特命全権公使して赴任する直前の1875年(明治8年)5月のことであった。当時日本の世論はその殆どがこの条約に反対であったが森はこの交換を発議した黒田清隆に向って、千島と樺太を交換したのは卓見であると称賛したという。(木村匡, 前掲書67ページ参照。)

The Young Arinori Mori's View on Russia

Tsuguo TOGAWA

Arinori Mori, celebrated Japanese political figure and the first Minister of Education in Meiji Japan, made a voyage to the Russian capital from London in the summer of 1866. At that time he was nineteen years old and studying at University College of the University of London. During the trip he kept a diary and later called it *Kōro Nikki* (Diary of a voyage to Russia). It was first published in 1941. The present author traces the young Mori's view on Russia and tries to find influences of the traditional British *Russophobia* upon the formation of his concept of the Russian menace to Japan.

Before departing from London for St. Petersburg, Mori sent a long letter to his brother in which he briefly explained the history of Russian expansion from the beginning of the 19th century. He ascribed the motivation for the Russian push toward the East to her historical urge to sea, her desire to obtain ice-free ports. Mori wrote that most Japanese thought Russia was a great power and believed that it was a *country of justice* (gikoku). Against those views, Mori depicted the Russian defeat in the Crimean War as a token of her *non-strength* (fu-kyō), and the Russian advance to Sakhalin and her short occupation of Tsushima as a proof of her ambition.

In Mori's views on Russia, we can trace the influence of the British press and the views of his tutor, Laurence Oliphant, ex-first secretary of the British legation at Edo (Tokyo) and member of the British Parliament at that time. Junzō Matusmura, Mori's companion in the voyage, told later how Oliphant, after his diplomatic and

journalistic career, emphasized the Russian menace to Japan. Other letters of Mori to his brother reveal that his voyage to Russia was not a sudden or casual excursion but the result of his study of international politics after his arrival at the British capital.

During his short stay in St. Petersburg, Mori met the following persons: (1) six Japanese students sent by the Tokugawa Shōgunate; (2) Tachibana Kōsai or Vladimir Iosifovich Yamatov, formerly a Japanese samurai and at that time an employee of the Russian Government, working as a translator in the Asiatic Department of the Ministry of Foreign Affairs; (3) Iosif Antonovich Goshkevich, ex-consul of the Russian Empire at Hakodate in 1858-65; (4) Pëtr Nikolaevich Stremoukhov, head of the Asiatic Department; (5) Admiral Efim Vasilevich Putiatin, onetime Russian envoy to Japan who had signed the Treaty of Shimoda in 1855 and the Treaty of Friendship and Commerce in 1858; (6) Sir Andrew Buchanan, British Minister at St. Petersburg. After his interviews with those persons, Mori's knowledge of Russian politics and society deepened, but his views on Russia did not basically change.

Shortly after his arrival at Kronstadt, Mori was advised never to talk about politics in Russia. He was astonished to be offered cigarettes by a Russian officer on board his ship in spite of the strict regulation against smoking in the port. From this experience Mori learned of the hypocrisy of Russian officialdom, and the contradiction between principle and reality in Russia.

Looking at many ships in the port, Mori described the situation of Russian commerce and trade. Using British materials, Mori wrote that Russian exports were slightly more than half of her imports, and came to the conclusion that Russia was incompetent at commerce. However, the figures which Mori cited in his diary were not reliable and neither was his conclusion.

Mori was much impressed by the people's worship of the Tsar, and gained the impression that the Russian autocracy was completely different from the British political system and resembled rather the Japanese and Chinese imperial systems. At the same time, he wrote that after the coronation of Alexander II, Russian politics were moving toward liberty. He also mentioned the Karakozov Affair, an unsuccessful attempt to murder Alexander II. Mori seemed to have heard about the affair from Sakuzaemon Yamauchi, supervisor of Japanese students in St. Petersburg. Yamauchi and Mori agreed that Japan should put an end to her civil war and unite for the purpose of her defense against the Great Powers.

As for the Russian foreign policy, Mori wrote of Russia's recent acquisition of the Amur area and the plan to construct railroads from European Russia to Siberia. In this connection, Mori declared that Russia's final aim was to conquer the whole world, and he warned against the possibility of her invasion of Ezo (Sakhalin and Hokkaido). Emphasizing the necessity of Japanese defense, Mori pointed out the

tremendous size of the Russian land and the huge number of men in her army, which made it difficult for her enemies to gain a final victory.

On the domestic side, Mori talked about the demoralization of Russian society. He noticed two bad features in Russia: one was the disputes among family members for the inheritance and the other adultery and the birth of children to unmarried girls. However, Mori admitted that such things were seen not only in Russia but in Japan as well. He was sorry he could not find the final solution to these problems. His concern must have continued to the publication of his famous articles *Discourse on wives and mistresses* (*Saisho-rōn*) in 1874-75. This example shows that Mori viewed Russia as Japan's teacher on what not to do.

A year after his return from Russia, Mori and his four friends sent a letter to Toshimich Ōkubo and others, emphasizing the aggressive intention of the Great Powers including Great Britain and the United States. Therefore it would be incorrect to say that Mori was pro-Britain and-American and a Russophobe as is usually said.

In the history of Russo-Japanese relations, third countries have often had a great influence upon the Japanese view of Russia: first it was Holland, from the late 18th century to the middle of the 19th; it was Great Britain from the last days of the Tokugawa Shōgunate to the Russo-Japanese War of 1904-1905; and lastly, it was the United States, from the end of the World War II to the present. Mori's view on Russia can be regarded as a case typical of the second period.